

植村直己冒険館機能強化基本構想

平成29年2月3日

兵庫県豊岡市

目次

第1章 現況と課題	
1. 植村直己冒険館の現状と課題	1
2. 冒険館を取り巻く現状と課題	4
第2章 冒険館の将来像	
1. 冒険館の将来像	6
第3章 機能強化の視点	
1. 目指す姿	9
2. 対策と視点	10
第4章 活動の拡張の具体的方策(案)	
1. 活動の拡張の方策	13
2. プログラムの具体的な展開(案)	19
第5章 場の拡張の検討	
1. 場の拡張の考え方	24
2. 新たな展開(案)	26
第6章 事業計画	
1. 活動方針	34
2. 各事業	35
第7章 管理運営計画	
1. 運営方式の検討	37
2. 施設利用	38
3. 組織の検討	39
第8章 事業推進計画	
1. 事業スケジュール	40
2. 事業費	41
3. 検討課題	42
【資料編】	
資料1. 施設の状況	43
資料2. 施設を取り巻く状況	51
資料3. 管理運営方式の考え方	56

第1章 現況と課題

1. 植村直己冒険館の現状と課題

(1) 植村直己について

- 昭和16(1941)年、兵庫县城崎郡日高町上郷(現在の豊岡市)に生まれる。
- 大学を卒業後、アメリカからヨーロッパに渡り、昭和41(1966)年にモンブラン、マッターホルン、アフリカ最高峰キリマンジャロに相次いで単独登頂に成功。
- 昭和43(1968)年には南米最高峰アコンカグアに単独登頂した後、アマゾン川6,000kmをいかだで下った。
- 昭和45(1970)年には日本人として初めてエベレストの登頂に成功するとともに、北米最高峰のマッキンリー(現在のデナリ)の単独登頂を果たし、世界最初の五大大陸最高峰登頂者となった。
- その後、植村の関心は極地に向けられ、グリーンランドでエスキモーとの共同生活を体験した後、昭和49(1974)年から50(1975)年にかけて北極圏12,000km単独犬ゾリ行を完走する。
- 昭和57(1982)年には南極大陸横断単独犬ゾリ行に出発するが、フォークランド紛争の勃発により断念。
- 昭和59(1984)年、彼の誕生日に世界初となるマッキンリー登記単独登頂を果たすが、その帰途に消息を絶った。
- 彼は生前から国際的な名声と評価を獲得し、国民栄誉賞、バーラー・イン・スポーツ賞をはじめ数々の賞を受賞する榮譽に浴した。消息を絶って30年余を経た今でも、彼の高潔で健全なスピリット(謙虚で誠実な人柄に裏付けられたチャレンジング・スピリット)は多くの人々を惹きつけている。



写真:エベレスト日本人初登頂
(屋外グラフィックより)

(2) 植村直己冒険館の沿革

- 植村直己冒険館(以下、「冒険館」という。)は、旧・日高町によって整備され、平成6(1994)年に竣工。以来、植村直己を顕彰する数々の事業を行ってきた。また、意匠性の高い建築は各方面より高い評価を受け、数多くの受賞歴を有する。

年	出来事
平成 6(1994)年	植村直己冒険館竣工
平成 8(1996)年	日本建築学会賞受賞、植村直己冒険賞創設
平成 9(1997)年	第1回植村直己冒険賞(尾崎隆氏)公共建築100選に選出
平成 15(2003)年	新館が開館
平成 16(2004)年	開館10周年、「ひと、こころ、植村直己」展、「冒険フェスティバル」開催
平成 18(2006)年	豊岡市と日高町が合併 冒険賞10周年記念展「チャレンジと心の交流2006 国府ふるさと展」 どんぐり山友会第1回富士山登山
平成 21(2009)年	土木学会デザイン賞
平成 23(2011)年	2011日本冒険フォーラム開催(明治大学) 第53次南極地域観測隊に市職員を派遣
平成 26(2014)年	開館20周年記念事業(講演会・記念式典)
平成 27(2015)年	2015日本冒険フォーラム開催(明治大学)
平成 28(2016)年	冒険賞20周年事業

表:植村直己冒険館の沿革

(3) 冒険館の現状と課題

① 建物・設備

躯体・設備ともに経年劣化が進行しはじめている

- 平成15(2003)年には新館が建設されているが、開館当時の建築躯体・設備ともに本格的な改修・修繕等はなされていない。経年による外壁の汚れが目立つ他、一部には雨漏りが見受けられる。
- 設備面では目立った支障は見受けられないが、整備後20年を経ていることから、今後は経年劣化による不具合が発生するものと推測される。躯体・設備を良好な状態で長期に渡って維持していくため、抜本的な修繕が望まれる。
- また、敷地は広大だが、あまり活用されていない。



写真:(左)冒険館を北東側より俯瞰 (中)クレパスをイメージした導入部は躯体の汚れが目立つ (右)新館

② 展示

常設展示は20年来更新されていないため陳腐化

- 本館の各展示室は通路から入るイグルー(雪洞)をイメージして配置。植村直己が実際に冒険で使用した装備品をメインとして、一部に映像コンテンツや体験展示が導入されている。
- 開館当時から大規模な資料の入れ替えやコンテンツの更新は行われていないため、映像装置をはじめとして備品類の劣化が目立つ。
- 新館は、植村直己の私品の陳列や冒険賞受賞者の紹介等で構成され、小規模ながら定期的に更新されている。
- 展示内容に大きな更新がないため、何度も繰り返し訪れてみたいという魅力に乏しい。植村直己の装備品類は他では見られない貴重な資料であり、これらを生かしつつ、新たに魅力ある展示を構成していくことが望まれる。



写真:(左)本館・体験コーナー (中)本館・冒険に使われた装備品 (右)新館廊下

③ 活動

植村直己や冒険者の顕彰を継続的に実施

- 平成8(1996)年、植村直己の優れた人となりを後世に継承するため、自然を相手に創造的な勇気ある行動した人または団体に贈る「植村直己冒険賞」を創設。以来、様々な分野で功績のあった冒険者を選考して毎年表彰し、今年で20周年を迎えた。
- また、明治大学の協力を受け、日本冒険フォーラムをこれまで2回に渡り開催してきた他、どんぐりフラッグやどんぐり山友会等、冒険やチャレンジを応援する活動を継続的に行ってきた。

主な受賞者	業績
関野 吉晴氏	人類の旅 5万km グレートジャーニー
大場 満郎氏	北極海・南極大陸 徒歩単独横断(史上初)
永瀬 忠志氏	リヤカーを引き世界各地を徒歩踏破 (4万km)
竹内 洋岳氏	14Project (ダウラギリに無酸素登頂し、 8000m峰 14座を完登)

表: 植村直己冒険賞の主な受賞者

④ 利用者の推移

利用者数は慢性的に伸び悩み

- 開館初年度の平成6(1994)年には、約9.5万人が施設を利用したが、翌年度には約4.3万人と半減。その後、利用者が年間で4万人を超えることはなく、近年は約2～3万人で推移している。
- 利用者が伸び悩む原因として、展示内容に変化がない、イベントが少ない等、また来たいと思える魅力に乏しく、リピーターが少ないことが考えられる。
- また、植村直己が消息を絶って30余年が経過し、植村直己その人を知らない世代が増えたこと、施設の存在を知らない人が多いことも原因として推測される。
- さらに、立地条件としてやや不便な交通アクセス、比較的観光客の多い城崎地区や豊岡地区、出石地区の導線から離れていることにより、観光客が気軽に立ち寄りにくいことも原因として考えられる。

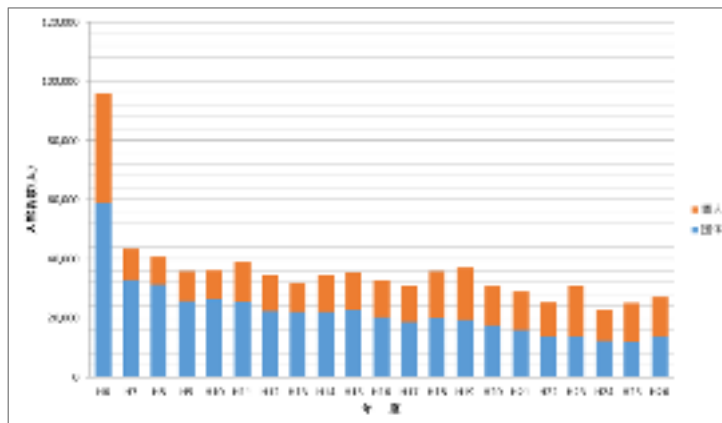


表: 植村直己冒険館の利用者の推移

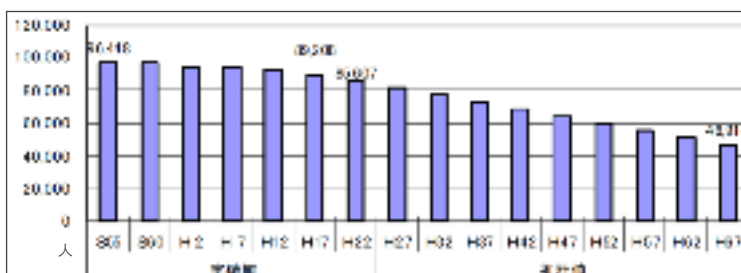
2. 冒険館を取り巻く現状と課題

(1) 豊岡市の現状と課題

① 少子高齢化・定住人口の減少

地域コミュニティの崩壊危機・家庭教育力の低下

- 豊岡市の人口は、約9.6万人をピークに減少を続けている。現在は約8.5万人を維持しているものの、今後も減少が続き、40年後には5万人を割り込むと予測されている。
- 65歳以上の高齢者が総人口に占める割合は27%を超え、日本全体の高齢化率約26%と同程度の水準を維持しているものの、実に市民の約3.7人に1人は高齢者となり、地域コミュニティ崩壊の危機や、家庭教育力の低下が現実的になりつつある。

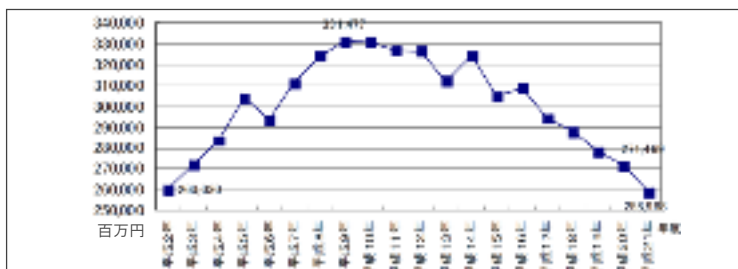


表：豊岡市の人口推移と将来の人口予測(豊岡市経済・産業白書より)

(2) 地域の活力・経済力の低下

豊岡から都会へ若者の流出に拍車

- 豊岡市の市内総生産額及び市民所得は、平成9(1997)年をピーク時に暫減を続け、2割以上減少している。
- 長期的な産業の衰退は、地域の活力を奪うと同時に就業の機会も減少するため、働き口を求める若者の流出に拍車がかかる。
- 豊岡市の定住人口の減少と経済力の低下に歯止めをかけるためには、子育て世代が定住しやすいしくみづくりが何よりも求められる。



表：豊岡市の市内総生産の推移(帰属利子除く)(豊岡市経済・産業白書より)

(3) 社会情勢の変化

① 植村直己を知らない世代の増加

消息を絶って既に30年余が経過

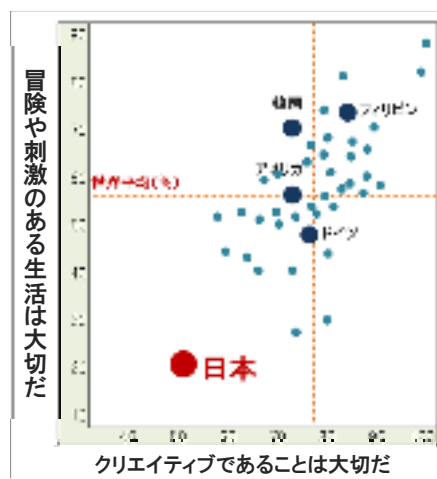
- 植村直己の業績と時代を共にした世代にとって、彼の存在や当時の世界中の熱狂は、30年余を経た今でも忘れがたいものだが、植村直己の名前や功績を知らない若者が増えてきている。
- 当時に比べて海外に行きやすくなった今でこそ、日本人が海外での冒険やチャレンジはさほど珍しいことではなくなったが、彼は先駆的な存在であり、そのスピリットや功績は色褪せることはない。

② 世界一チャレンジしない日本の若者

際立って低い若者のクリエイティブ志向・冒険志向

- 社会学者たちによる国際プロジェクト「世界価値観調査」によれば、日本の20代のクリエイティブ志向や冒険志向の比率は際立って低い。
- 「自分で考え積極的に新しいことを提案できる」ことや、「失敗を恐れずチャレンジ精神が旺盛」な若者が減少していることが解る。
- このことは、学習意欲や労働意欲の低下との因果関係が推測でき、豊岡市はおろか、日本の将来が危ぶまれる状況と考えることができる。

図:「世界価値観調査」(東京大学・電通国際情報サービス)を元に作図



現状と課題・まとめ

冒険館

- 躯体・設備の経年劣化
- 開館以来未更新の常設展示の陳腐化
- 利用者数の慢性的な伸び悩み

豊岡市

- 少子高齢化・定住人口の減少、地域コミュニティ崩壊の危機・家庭教育力の低下
- 地域の活力・経済力の低下で若者が流出

社会情勢

- 植村直己を知らない世代の増加
- 若者のクリエイティブ志向・冒険志向の低さは世界一

開館20年を経た冒険館は、時代の変化に合わせ
新たな役割を担い、生まれ変わる事が求められる

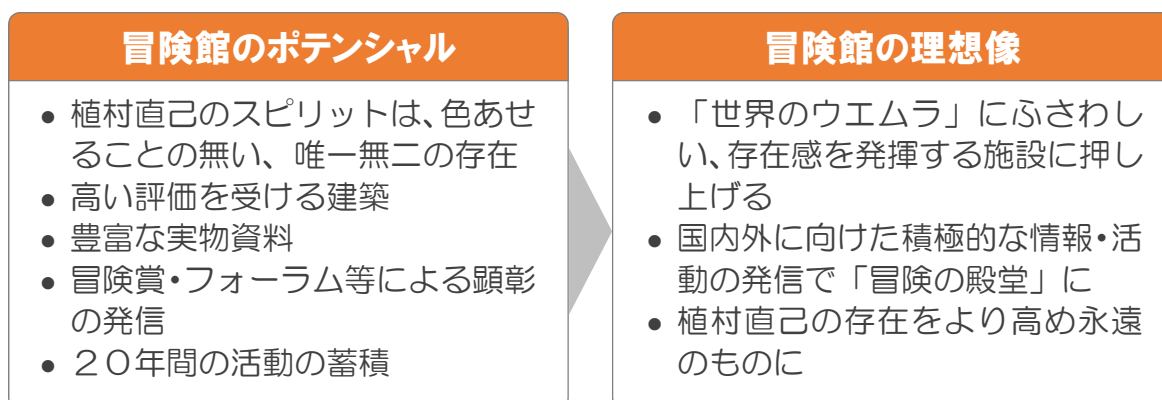
第2章 冒険館の将来像

1. 冒険館の将来像

(1) 将来的な理想像とこれまでの姿

① 冒険館の将来的な理想像

「冒険の殿堂」として、世界の植村直己にふさわしい存在へ



- 植村直己のスピリットは、いつまでも色あせることのない唯一無二の存在であり、冒険館は、植村直己を永続的に顕彰する施設として、豊富な実物資料やこれまでの活動を継続していく。
- 将来的には、国内外に向けた積極的な情報や活動の発信で、世界的な知名度を誇る植村直己にふさわしい、「冒険の殿堂」として存在感を発揮する施設に押し上げていくことを目標とする。

② 将来的な理想に向けたステップ

理想を見据えつつ、豊岡の未来へ一層貢献する施設へ

- 施設を運営・維持管理していくための人員や予算は限られており、短期間のうちに理想を実現することは、現実的には困難である。
- 従って、理想はきちんと見据えつつ、しっかりと足下を固めて基盤を作ることが必要となる。
- そのため、まずは、豊岡市や市民にとって真に必要なしくみづくりを行っていく。

③ これまでの姿

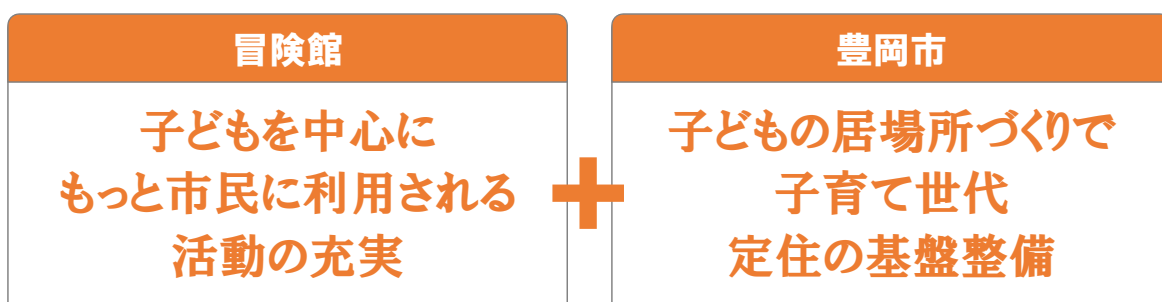
理念は継承しつつも、主に植村直己の顕彰に留まっていた



- 冒険館は、設立時に定められた施設理念を継承し、現在に至るまでその理念に沿った活動を展開してきた。しかし、開館後20年余を経て、施設を取り巻く環境や社会情勢の変化を受け、その役割にも変化が求められている。

④ 機能強化の視点

市民にもっと利用され、豊岡市の施策に貢献する施設へ



- 冒険館が豊岡市や市民にとって真に必要とされるため、まずは次世代を担う子どもを中心に、もっと市民に利用される施設に生まれ変わらせる。そのための活動を充実させる。
- 子どもの居場所をつくり、豊岡市の最重要施策である、子育て世代定住の基盤整備の一翼を担う。
- この二つの視点により、冒険館を機能強化する。

(2) これからの姿

植村直己のスピリットを継承し、さらに活動を拡げて機能強化



- これからの冒険館は、施設理念を継承しつつ、さらに活動を拡げ機能強化を図る。
- 唯一無二の植村直己のスピリットを基軸に、ここにしかない感動を提供する。
- 一日では遊びきれない多彩なプログラムを開発し、ここを訪れる全ての子どもたちへたくさんの学びや体験の機会を提供する。
- 施設を訪れるたびに、いつも新鮮で発見があるようにして、また来たい、何度も来たいと思えるようにする。
- この三つの方針により、定住人口の拡大や交流人口の拡大の一翼を担い、豊岡市のブランド力向上に寄与する施設として再構築する。



第3章 機能強化の視点

1. 目指す姿

- 訪れる人の夢とやる気を育む。活動の領域を拡張して、にぎわいと活気をもたらす施設に生まれ変わらせる。そのため、目指す姿を現せるような館名の変更も視野に入れ、機能強化の方策を検討していく。

“植村直己記念・冒険体験館（仮称）”

～夢とやる気を育む、チャレンジ応援施設～

何よりも大切なのは、
子どもたちが家族や地域の人たちに見守られながら、
ここで繰り返し遊ぶことによって成長していけること。
全ての子どもたちの居場所をつくり、夢とやる気を育む。

大人になって、
「自分はここの遊びを通して成長したんだよな」と、
振り返ってもらえるような活動を展開する。

機能強化の対策

対策1

何度も施設に訪れてもらう
まずは豊岡市民に
愛される

対策2

子どもたちに植村直己を
知ってもらう
何よりチャレンジ精神を育む

機能強化の視点

「活動の拡張」で機能強化

方針1

功績の顕彰と
広報の強化

新たな
ファンをつくり
初めての
利用者を増大

方針2

利用者
満足度の向上

多彩な
プログラムの
提供で
リピーターを確保

方針3

活動プログラムの
充実

子ども利用を
促進し
チャレンジする
気持ちを育む

方針4

運営の安定
収支改善

地域住民が
運営に
参加する
しくみを提供

2. 対策と視点

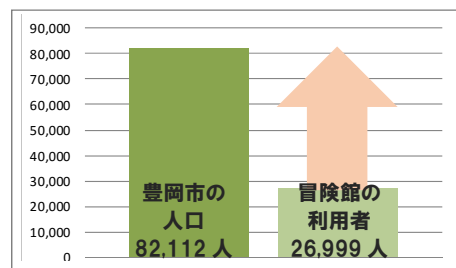
(1) 対策

① 対策-1

何度も施設に訪れてもらう まずは豊岡市民に愛されることが必要

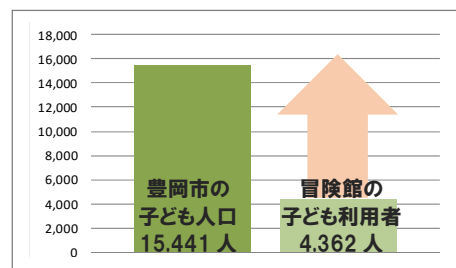
ア.豊岡市・但馬地方の人にもっときてもらう

- 利用者数の低さが収支の悪化に直結している。
- 約8.2万人の豊岡市民、さらに、約18万人の但馬地方の人にもっと来てもらえるようにする。



イ.子どもが遊びたいと思える場所には人が集う

- 平成26年度の子ども利用(18歳以下)は約4.4千人で利用者全体の16.1%に留まる。
- 豊岡市の子ども人口約1.5万人が繰り返し遊びに来るようになれば、それだけでも利用者は飛躍的に向上する。
- にぎわいのある施設には、観光客も自然と集まってくる。



※数値は平成26年度統計

② 対策-2

子どもたちに植村直己を知ってもらう。居場所をつくる 何よりチャレンジ精神を育むことが必要

ア.植村直己を知らない世代に知ってもらう

- 植村直己とそのチャレンジング・スピリットは、永遠に色あせることの無い存在。
- 準備にかける情熱と努力、目標を立てて進む力、人に学ぶ謙虚な姿勢と気遣いを知ってもらい、自分が生きる事へのヒントややる気を得られるようにする。

イ.豊岡の子どものチャレンジ精神を育む

- 豊岡市の子どものクリエイティブ志向や冒険志向を向上させ、「生きる力を育む」。
- 「積極的に提案できる」「失敗を恐れない」若者を増やす。豊岡の子どもを日本一チャレンジする若者に育てていけるよう、周りで支える。
- 近年、豊岡市でも顕著になりつつある、不登校や引きこもりの子どもたちの居場所をつくる。七大陸最高峰最年少登頂を成し遂げた野口健氏が、高校停学中に読んだ植村直己の著書に感化されて登山家を目指したように、頑張る気持ちになってもらえるようにする。

(2) 視点

① 視点1 功績の顕彰と広報の強化

新たなファンをつくり初めての利用者を増大

- 植村直己のスピリットは、色褪せることのない、唯一無二のものとして、顕彰はより一層強化する。
- 積極的な広報PRで認知度を高めるとともに常に話題性を提供する。
- 特に若い世代をターゲットに、新しいファンを増やしていく。

施設名	場所	入館者数		敷地面積
		H25年	H26年	
鳥取砂丘砂の美術館	鳥取県鳥取市	555,355人	464,377人	2,800㎡(延床面積)
鳥取県立とっとり花回廊	鳥取県西伯郡南部町	334,320人	389,338人	29,944㎡
城崎マリワールド	豊岡市内	372,685人	368,939人	20,000㎡
天橋立ビューランド	京都府宮津市	321,467人	337,981人	9,448㎡
福井県立こども家族館	福井県大飯郡おおい町	245,561人	274,823人	4,986㎡
水木しげる記念館	鳥取県境港市	259,371人	204,425人	1,643㎡
神崎農村公園コーデルの森	兵庫県神崎郡淡河町	125,159人	121,474人	80,000㎡

表：周辺で集客力の高いミュージアムや集客施設
(出典：総合ユニコム/レジャー・レクパーク総覧 2016)

② 視点2 利用者満足度の向上

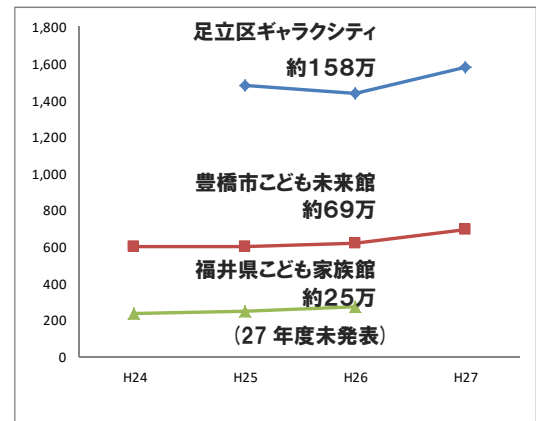
多彩なプログラムの提供でリピーターを確保

- 利用者数の増減傾向とリピーターの割合には相関関係があり、利用者数が減少する施設はリピーターの割合が低い傾向にある。
- 多彩なプログラムの提供で、一度だけで飽きられないようにしてリピート利用を促進する。

③ 視点3 活動プログラムの充実

子ども利用を促進しチャレンジする気持ちを育む

- 子どもがまた来たい、遊びたいと思えるようになれば、子どもたちを中心に新たな地域コミュニティが生まれる。
- 子どもたちが成長していけるような多彩な遊びや体験を開発し続けていき、子ども利用を促進する。
- 心や体にハンディキャップを持つ子どもでも、等しく楽しくチャレンジできるようにする。



表：子どもに遊びを提供している施設は利用者数が高止まりする(福井県の子ども家族館は、嶺南地方の人口約14万に対し年間約25万人を集客)

④ 視点4 運営の安定・収支改善

地域住民が運営に参画するしくみを構築

- 地域の資源や人材を積極的に活用し、イベント等の多彩な活動を展開し集客を図ることにより、新たな収入方策で経営を改善する。
- 観光協会や女性組織をはじめ、地域の住民や団体、地元企業等が、積極的に運営に関与していけるしくみづくりを行い、神鍋高原等と連携する。地域全体を巻き込む事業を実施して観光を活性化し、地域にお金が落ちるようにする。

第4章 活動の拡張の具体的な方策(案)

1. 活動の拡張の方策

(1) 基本的な考え方



- 子どもを中心に、豊岡市の人たちにもっと冒険館を利用してもらうため、まずは広報を強化して冒険館の存在や活動を知ってもらう。
- 子ども達が自らの力でチャレンジできるようにして、遊びを通して成長できるプログラムを提供する。
- チャレンジする全ての人々を応援する事業やプログラムを展開し、夢が実現できるように応援する。
- 地域住民が積極的に参加できるしくみづくりで、冒険館のにぎわいと活気をもたらすとともに、経営状況を改善させる。

(2) 実現のための4つの方策

① 方策1 施設の認知度を高める事業

ア. 広報の強化

インターネットは情報収集に最も活用される手段

- 現在のホームページは充実させ、SNSの併用で積極的に情報を発信、露出度を高めて活動を知ってもらう。
- 世界的な知名度を誇ることから、多言語化して世界中に情報を提供。インバウンドも見据える。



現在のホームページは改編し、積極的に情報を発信できるようにする

イ. 現在の冒険を伝える

ホットな話題から知らない世代を引き込む

- 例えば、野口健や竹内洋岳等、現在活躍しマスコミに話題を提供している国内外の冒険家の情報を、企画展やホームページ等でこれまで以上に積極的に取り上げていき、そこから植村直己につなげていけるようにする。



冒険家の挑戦アーカイブを検索
今の話題から植村直己につなげる

ウ. わかりやすい施設の「売り」をつくる

冒険館と言えば！冒険館に行けば！

- 例えば、西日本最大、日本海側最大のボルタリング設備等、冒険館といえどもあれ、冒険館に行けばあれがあると、一言で説明できる解りやすい施設のセールスポイントを作ることによって、話題性を高め、来館の動機付けにする。

例えば、西日本最大・日本海側最大のボルタリング等、解りやすい施設の「売り」



② 方策2 成長していける事業

ア. 独自性・参加性・体験性

ここでしかできない体験を提供

- 植村直己のスピリットを受け継ぎ、子どもたちの生きる力を育む遊びや体験プログラムを提供。施設内や敷地を最大限有効活用し、自然と郷土に親しんでもらう。
- 子どもの発達を促すため、乳幼児から元気に体をいっぱい動かせるプログラムや遊びを提供する。
- 道具や材料を工夫して、考えながらものをつくる遊びやプログラムも提供する。サバイバル体験や防災体験等の多彩なプログラムを提供し、子どもたちの野生復帰を手助けする。

【プログラムの展開例】



家族や兄弟とサバイバル体験



家族で郷土の自然に親しむ



体を動かす乳幼児の遊び



本当に冒険する

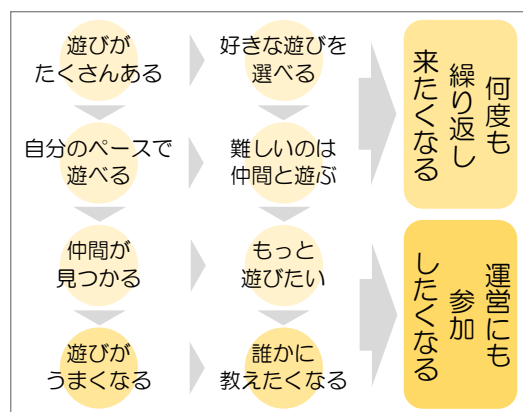


みんなで協働して創作する

イ. 自主性・自発性を促す

自分の好きな事が見つかる、自分のペースで遊べる

- 子どもの多様性を鑑み、簡単なものでも出来るだけたくさんの遊びを用意する。その中から自分の好きな遊びを見つけ、最初は一人で、次の遊びは仲間を見つけて遊べる等、一日では遊びきれないようにする。
- 繰り返し遊んで、人に教えるのが好きな子には、運営にも参加してもらう。

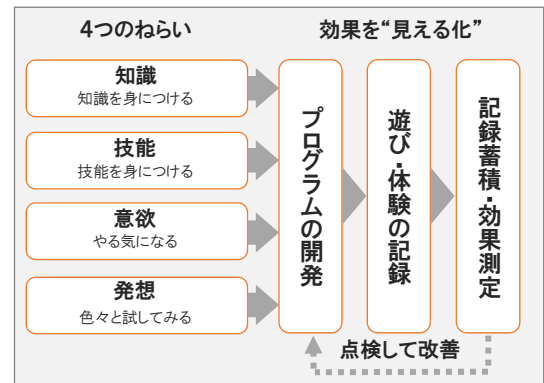


遊びを通して自主性・自発性を促す

ウ. プログラムの開発・点検・改善

「ねらい」を意識し開発、効果を“見える化”

- 遊びやプログラムは子どもが進んで楽しめるようにするとともに、楽しさの裏側にどんな「知識」や「技能」が身につくのか、「意欲」が持てるか、「発想」をふくらませられるか、4つのねらいを設けて開発する。
- 結果を記録していき、その蓄積によって遊び・体験の「効果」を“見える化”してその効果をフィードバックし、プログラムをステップアップする。

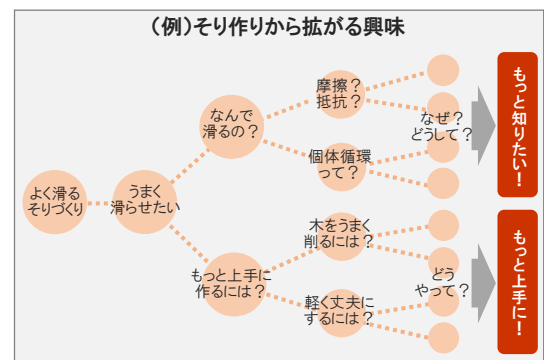


図：プログラム開発の考え方

エ. ステップアップして成長を助ける

つながる、ひろがる、深まる体験を提供

- ひとつの遊びを通して、その遊びを工夫して深めたり、興味を持って調べていくと違う遊びに広がったりできるよう、プログラムにつながりを持たせる。
- 子どもも保護者も、遊びを通して興味や知識、技術が広がり、深まっていくことにより、何度遊びに来ても楽しめるようにする。



図：興味がつながる遊びで子どもの成長を助ける

オ. 自らチャレンジする気持ちを促す

自分で成長が解る、目標を持てるように

- ここでの遊びを通し、自分の成長が解るように、結果は記録化して本人はもちろん、保護者がいつでも見られるようにする。
- 施設や敷地全体を使って、定期的にイベントや遊びの競技会等を開催する。ここで繰り返し遊んできた成果を競ったり、発表できるようにして、子ども自らが目標を立てられるようにする。
- 例えば、目の不自由な子どもと一緒にボルタリングにチャレンジする競技会を開催する等、誰もが等しく楽しくチャレンジできるようにする。

③ 方策3 夢の実現を応援する事業

ア. これまでの取組を一層強化

がんばる全ての人を応援する

- これまでのどんぐりフラッグ、チャレンジャー紹介、どんぐり山友会の活動はより一層強化。
- 受験や就職活動等、色んなことに頑張っている人が、目標とやる気を持てるように、本館から励ましのメッセージを送れるようにする。



例：励ましのメッセージ

イ. チャレンジの聖地にする

年に一度は大規模イベント

- 夏になると、全国から徒歩や自転車でチャレンジャーが集まってくる等のイベントを開催。どんなことへも頑張った人・頑張りたい人は気軽に参加できる。
- みんなで応援し、お祝いすることによって、目標とやる気を持てる、達成感を味わえる。毎年ここに来たくなるようにする。



例：チャレンジ発表キャンプ

④ 方策4 にぎわいと活気をもたらす事業

ア. 地域住民参画のしくみづくり

地元企業や住民が積極的に参加できる運営方式を検討

- 日高地区や豊岡市の他の地区と幅広く連携し、地域全体ににぎわいがひろがるように、民間企業の経営ノウハウや、地域住民の活力を積極的に取り入れることができる管理運営の方策を検討する。

イ. 収支改善の方策

地産販売や飲食機能でさらに楽しみを提供

- 定期的に朝市を開催する等して、観光客はもとより、地域住民も集まるようにする。
- 道具をレンタルし、お手軽サバイバル(キャンプ)やバーベキュー等の敷地活用で収入を得る。
- 例えば、害獣として問題化しているシカやイノシシを使ったジビエ等も提供できるようにする。



例：朝市で地産品の販売

2. プログラムの具体的な展開(案)

(1) 展開の考え方

① ここでしかできない、冒険館ならではの遊びを提供

- 冒険館らしい、難しいことにチャレンジできる遊び、豊岡らしい、郷土の自然に親しむことのできる遊びや体験を提供する。
- 植村直己の知恵と工夫を追体験できるような遊びを提供する。例えば、冒険の舞台となった「山」「ジャングル」「極地」をイメージした遊びや体験ができる。
- 神鍋高原や円山川等、豊岡の豊かな自然を活用し、四季折々の変化を取り入れる。

【プログラムの展開例】



例：5大陸最高峰をイメージしたボルタリングやアスレチック



例：極地冒険の知恵や工夫



例：アマゾンをイメージした木登りやいかだ下り体験。自分たちで作るところからはじめる

② 水準の高い遊びや体験を提供

- 都会にはない、または費用がかかるような遊びが気軽にできるようにする。
- 一流の指導者による本格的な冒険ツアー等、身近な場所で一流・ホンモノの体験ができる。



例：自分で道具を作って獲物を捕ったり採取したり、さらに自分で調理する

③ 家族や仲間の絆を深める遊びを提供

- 親子で安心・安全に体を思い切り使って遊ぶ。遊びを通して親子で成長できる、仲間ができるようにする。
- 未就学児から楽しみ、保護者は子育て仲間が作れるようにする。



例：植村直己の冒険がイメージできる遊具・子どもを安心して遊ばせながら、ママは友だちとゆっくりできる



例：手ぶらで遊びに来て、気軽に体験できる。子どもを中心に、三世代で楽しめる。大人同士でも楽しめる

- お母さんや女の子も楽しめるように、女性が自ら行ってみたいと思えるような体験も提供していく。



例：自然の恵みを使った料理教室や、イクメン講座、アクセサリーづくり等、女性が楽しめる体験を充実

④ 市内の学校と連携し教育的な効果を高める

- 市内の幼稚園・保育園・小中学・高校と連携し、教育的な効果の高い遊びや体験。
- ふるさと学習やアクティブ・ラーニングの場としても活用する。クラスや仲間同士で共同して目的を成し遂げ、達成感を感じられるようにする。
- 教育委員会と連携し、不登校や引きこもり、発達障害の子どもの居場所の一端となるプログラムを開発・提供する。



例：みんなで秘密基地(すみか)を作って共同生活してみる夏休みの林間学校にも対応



例：(左)ふるさと学習やアクティブ・ラーニングの一環としてコウノトリの行動を調査
(右)円山川を調査して、防災ハザードマップを作る



例：中高生が参加できる、学校にないクラブ活動や、不登校児童の平日の居場所をつくる

⑤ 冒険館を基点に豊岡市全域と連携した観光プログラムの開発

- 神鍋高原の自然資源を活用した体験を提供する。
- 兵庫県下の子どもたちを対象に、林間学校を受け入れられるしくみづくりを行う。
- 出石や城崎等、豊岡全域を周遊できる観光のしくみづくりを行う。
- 子どもを安心して預けられる新たなツアーを開発する。週末に子育てから解放されることにより、子育て世代にゆとりが生まれるようにする。
- 子どもと祖父母は冒険館で遊び、父母は神鍋や出石をめぐる。夜はみんなで城崎に泊まる等、多世代が思い思いに豊岡を楽しめるようにする。
- 年齢・性別・障がいの有無、国籍や文化の異なる人たちが、ともに生きることを学ぶ「ユニバーサルキャンプ」の開催等、社会づくりや未来づくりに寄与するイベントや観光ツアーを開発する。



例：豊岡市全域でトレッキングや登山、雪上キャンプ等、インストラクターの指導で安全に本格的な体験

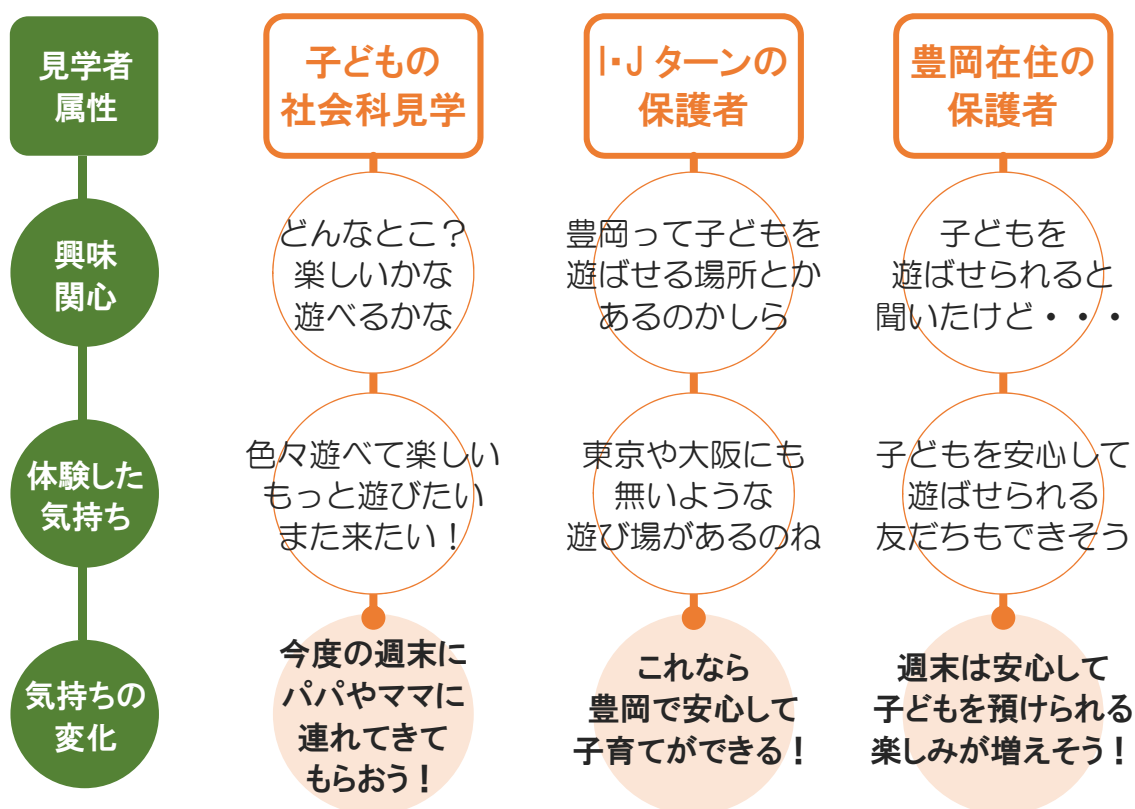
- 市内外のスポーツ施設や、「スポーツクラブ21とよおか」をはじめとするスポーツクラブ等と連携し、新たな地域間の交流やスポーツ・ツーリズムを形作る。

施設名	所在	施設名	所在
市民体育館	立野町	植村直己スポーツ公園	日高町野
総合体育館	大磯町	神鍋野外スポーツ公園	日高町名色
豊岡総合スポーツセンター	戸牧	神鍋山周遊公園	日高町太田
円山川運動公園	土淵	日高文化体育館	日高町祢布
城崎ボートセンター	城崎町楽々浦	出石総合スポーツセンター	出石町福住
竹野中央公園	竹野町須谷	但東スポーツ公園	但東町小谷

表：豊岡市の主な体育施設

(2) 冒険館を訪れた利用者の気持ち

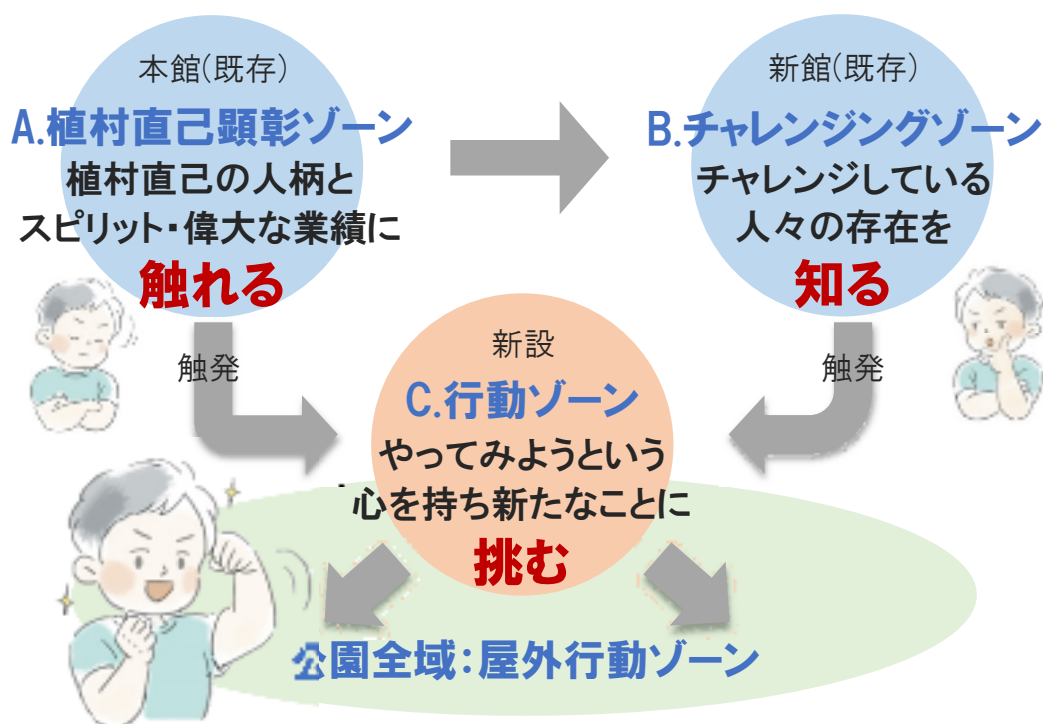
- 子どもを中心に、様々な属性の利用者に冒険館の活動へ関心を持ってもらう。ここにしかない、一流の遊びやプログラムを提供することにより、冒険館のファンになってもらい、リピート利用を促進する。



第5章 場の拡張の検討

1. 「場の拡張」の考え方

(1) 「触れる」「知る」「挑む」



- 現在の建築物や展示内容では「活動の拡張」の方針を充分に実現することが難しいと考えられるため、既存館の再編整備や、新たに新館整備を検討する。
- 本館を「植村直己顕彰ゾーン」とし、植村直己の人柄とスピリット・偉大な業績に「触れる」機能を持たせる。
- 既存の新館は、「チャレンジングゾーン」とし、チャレンジしている様々な人々の存在を「知る」機能を持たせる。
- 新たに「行動ゾーン」を新設し、やってみようという心を持ち新たなことに「挑む」機能を整備する。
- これらの場の拡張により、「触れる」「知る」を通して触発され、自分自身がやる気になって「挑む」流れを作っていく。

2. 新たな展開(案)

(1) 新たな展開の視点「主観的に接する」

- 開館当時から20年余を経て、抜本的な更新がされていない展示は、新たな展開へ生まれ変わらせることを検討する。(※ 改修経費試算 P41～P42 案A～案E)
- 現在の展示は、植村直己を客観的視点で紹介しているが、利用者の夢ややる気を育むためには、利用者の主観的視点で植村直己に触れることができるようにする必要がある。



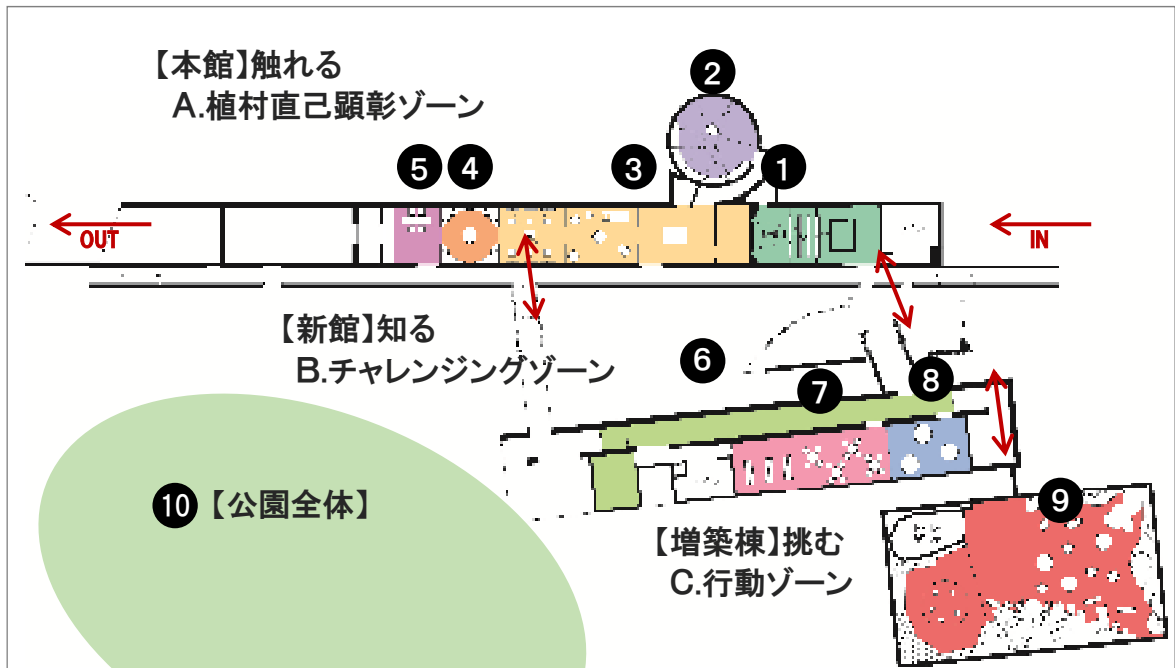
新たに目指す展示

展示によって「触発され」「挑戦へ導かれる」ことをめざし、
利用者が“主観的視点”で植村直己と冒険に接する場

(2) 新たな展示構成(案)

① ゾーニングの考え方

- 植村直己のスピリットに触発され、そこから挑戦に導く。自ら「やってみよう！」と思う心が自然と芽生えるようにする。



② デザインの考え方

- 展示空間の構成にあたっては、各方面から高い評価を受ける建築意匠の調和に留意し、デザイン的に洗練された空間構成を目指す。
- また、例えば、日本一のボルタリングを形づくる等、ここにしかないもの、ここに来ればあれがあるとといった、名物となるコンテンツづくりを行い、来館の動機を高めるとともに、話題性を高めて広く市内外から利用者が集まるようにする。

③ 荒天時でも遊べる場所の確保



- 豊岡市は日本海側気候であり、豪雪地帯でもある。年間を通し実に2日に1回は降水が観測される。特に冬季は子どもたちが外で遊ぶ機会に乏しいことから、全天候型の遊び場機能を設け、いつでも好きな時に元気に遊べるようにする。



	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年間
平均降水日	24.1日	18.8日	16.6日	12.8日	12.2日	12.0日	13.3日	11.6日	13.9日	13.2日	17.3日	21.6日	187.5日
降水日/月	77.7%	67.1%	53.5%	42.7%	39.4%	40.0%	42.9%	37.4%	46.3%	42.6%	57.7%	69.7%	51.3%

表：豊岡市の近年(1995～2015)の平均降水日(≧0.5 mm)(気象庁の公表データを集計)

③ 展示構成(案)





コーナー	概要		
A.本館【触れる】植村直己顕彰ゾーン ● 植村直己を顕彰するゾーン。植村直己のチャレンジスピリットがどのように育まれたかに多様な視点から触れる。			
① 植村直己の生涯	植村直己の生き様を概観する ● シアタースペースを有効活用。 ● 最新の映像システムに更新。ランニングコストの低減に配慮する。 ● 残された映像素材を活用し、複数の映像コンテンツの製作を検討する。	 現在の植村直己の生涯	
② 植村直己言葉の宇宙	植村直己が見た景色に触れる ● 現在の「冒険の一場面」を改編。 ● 植村直己の言葉と、彼自らが撮影した写真や映像で構成された新たな映像コンテンツを制作する。 ● 植村直己が見た風景の中で、彼の言葉をたどっていくことで、そのスピリットに触れる。	 円形空間全体と映像を使って印象的に展開	
③ 植村直己真の力	「3つの力」で植村直己の真の姿を知る ● 植村直己がなぜ数々の業績を残すことができたのか。その源泉となった彼の「原動力」を3つのカテゴリーから分析。一つ一つの小さな積み重ねが偉大な業績を生んだことを知る。		
	① 立ち向かう力 植村直己の「挑戦する心」が、周到な準備や環境作りを背景に育まれたことを紹介。 	② 生み出す知恵 目標を成し遂げるために培った「オリジナリティや創造力」を実物資料や体験を通じ紹介。 	③ 支え合う人 温かな人間性をもって築き上げた、植村直己の人間関係を、具体的なエピソードを中心に紹介。 

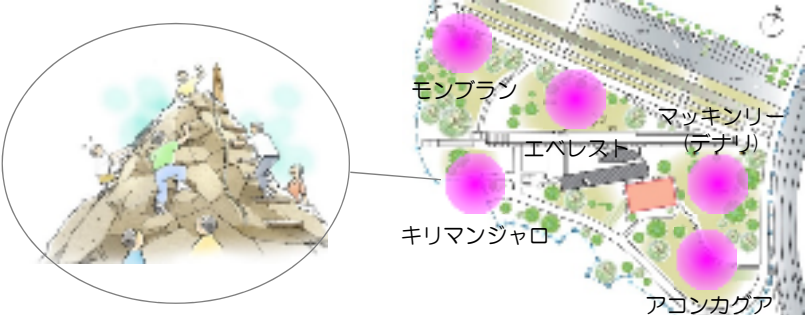




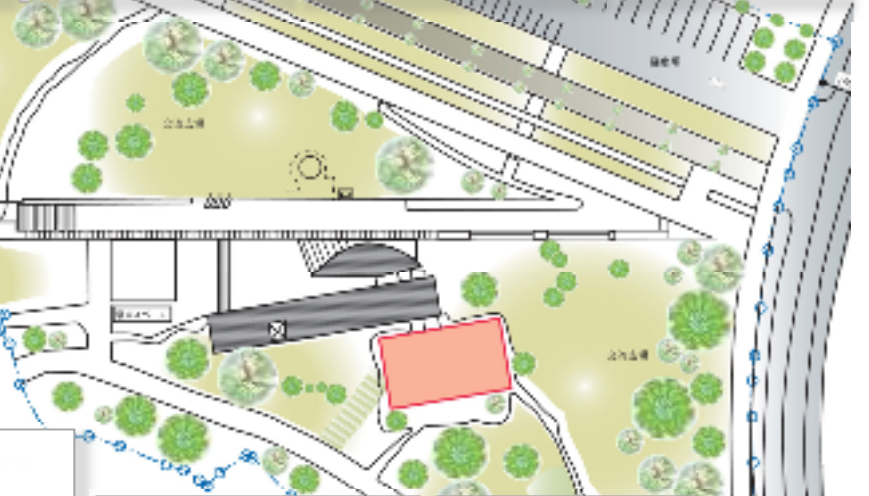




コーナー	概要
④ 1984/2/13 ~ 永遠の植村直己 ~	<p>その魂は今も生き続けることを実感</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 植村直己の最後の冒険となったマッキンリー(現在のデナリ)冬季単独登頂と、消息を絶ってからの捜索等を詳細に紹介。 ● 捜索隊によって発見されたキャンプの再現を中心に、彼の装備品や当時の報道資料等によって構成。 
⑤ チャレンジ宣言 ルーム	<p>明日への第一歩を踏み出す場所</p> <ul style="list-style-type: none"> ● これまでの展示を通し、植村直己のチャレンジし続けるスピリットに触発された利用者が、「自分もやってみよう」という気持ちになり、明日への第一歩を踏み出す場。  <p>チャレンジ宣言カードに記入し、みんなに公表!</p> <p>将来の自分へ手紙を送る「10年後の私へ」投函ポスト!</p>

コーナー	概要
<p>B.新館【知る】チャレンジングゾーン</p> <p>色々な形でチャレンジしている人を知り、触発される</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 様々なチャレンジをさらに知るゾーンとして、国内外の冒険家や、様々な分野でチャレンジしている人を紹介。利用者がそのチャレンジスピリットに触発されることを目指す。 	
<p>⑥ 殿堂ロード</p>	<p>国内外の冒険者を紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 既存展示を充実させ、これまでの植村直己冒険賞受賞者に加え、著名な冒険家の功績等をより解りやすく紹介。 ● デジタルアーカイブを充実し、国内外の冒険家の軌跡が解るようにする。 
<p>⑦ チャレンジ応援</p>	<p>様々な分野でチャレンジしている人々を紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 例えば、自転車で世界や日本一周、日本百名山登覇等の冒険から、子どものちょっとした冒険、さらには冒険に留まらず、様々な分野に現在進行形でチャレンジしている人々を紹介。 ● 利用者が「自分にできるチャレンジ」を発見。「自らチャレンジする勇気」を得られる場所。 
<p>⑧ 企画展示室</p>	<p>チャレンジをテーマに多彩な企画展を展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 植村直己の数々の冒険の中から、特定のテーマを掘り下げた企画展を開催する。 ● 冒険賞に合わせ、受賞者の企画展や、国内外の冒険家を掘り下げた企画展を開催する。 ● 子どもを始め市民から公募し、自分の小さな冒険やチャレンジしていること等、誰もが気軽に企画へ参加できる企画展も開催する。

コーナー	概要	
<p>C.新設棟【挑む】行動ゾーン</p> <p>利用者自らが新たなことにチャレンジする</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 植村直己や、様々なことにチャレンジしている人々のスピリットに触発され、利用者自身が自らやってみようという心を持ち、新たなことにチャレンジする場。 ● 特に、子どもの「自分で考え積極的に新しいことを提案できる」力や、「失敗を恐れずチャレンジ精神が旺盛」な気持ちを育むコンテンツを充実させる。 		
<p>⑨ チャレンジフィールド</p>	<p>冬季や荒天時でも、子どもがいつでも遊べるチャレンジ大空間</p> <p>ア. 山ゾーン イ. 極地ゾーン ウ. ジャングルゾーン エ. オープンスペース</p>	
「3つの力」から学び体験しながら成長		
<p>① 立ち向かう力</p> <p>「ちょっと難しい」ことや、「初めてのこと」に挑戦 難問や難関を設定、自分の力で乗り越える</p>	<p>② 生み出す知恵</p> <p>あるもので冒険や生活に役立つ『モノ』を創り出す 組合せの工夫で新たな機能を生み出す</p>	<p>③ 支え合う人</p> <p>グループで協働する。助けあう、いっしょに成し遂げる 高齢者から生活の知恵やモノづくりを教わる</p>
<p>ア. 山ゾーン</p>	<p>岩肌が露出した山岳造形の中で挑戦！</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 植村直己の登山家の側面をイメージ。 ● 岩肌が露出した山岳造形を設け、クライミングにチャレンジ。 ● 技術の習熟に応じて複数の難易度を設けたボルタリングや、ロープ結び、ルート選定等、クライミングに必要な知識や技術を得ながら楽しくチャレンジ。 ● 難易度の高いプログラムや危険なプログラムは運営スタッフがアテンド。 	

※ 新設棟 整備事業費案は別紙参照 (P41 F案)

コーナー	概要
イ. 極地ゾーン	<p>北極をイメージした氷河や雪造形の中で挑戦！</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 極地探検をイメージして、氷河や雪原造形を設け、寒冷地の冒険にチャレンジする。 ● 壊れない、よく滑るそりの作り方や、風に飛ばされないテントの張り方等、寒冷地で過ごす上で必要となる知識や技術を習得する。 ● イヌイットの工芸品づくり等、ものづくりプログラムも展開していく。  
ウ. ジングルゾーン	<p>アマゾンの密林でサバイバル体験！</p> <ul style="list-style-type: none"> ● アマゾン川6000kmいかだ下りをイメージした密林造形を設け、自然の中で楽しく遊ぶ知恵や工夫を得る。 ● 運営スタッフがアテンドする木登りから、いかだ作り、周辺の山野から、求めた素材で工芸品づくりを行う等、「子どもの野生復帰」を手助けする。 
エ. オープンスペース	<p>多彩なチャレンジプログラムを提供する可変スペース</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 様々な目的に利用できるオープンスペースを中央に設ける。 ● チャレンジしてきた子どもたちによる協議会や、講座・講演会等、多彩なプログラムを提供できるようにする。 

コーナー	概要		
<p>⑩ 屋外行動ゾーン</p>	<p>屋外フィールドを使ってさらなるチャレンジ！</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 屋外の広大な敷地を有効に活用し、チャレンジフィールドのプログラムを屋外で、さらにダイナミックに展開できるようにする。 ● 世界5大陸最高峰初登頂をイメージし、敷地内に異なる5つの体験エリアを設定、各エリアで特色ある体験ができるようにする。 		
<p>● 屋外フィールドを使い、様々な体験プログラムやイベントを展開。子どもを中心に、大人も楽しめるようにする。家族や三世代で普段使いができるようにする。</p>			
<p>【敷地を活用したプログラムの展開例】</p>			
<p>家族の遊び場</p>	<p>サバイバルこっこ</p>	<p>魚をさばいて食べる</p>	<p>朝市</p>
			
<p>火おこし</p>			
	<p>円山川は 手ごわいぞ！</p> 		<p>就職 できました！</p> 
<p>ほんとのサバイバル</p>	<p>❖❖冬山キャンプ</p>	<p>・キャンプファイヤー</p>	

第6章 事業計画

1. 活動方針

- 理念を継承し、活動の拡張によって冒険館を生まれ変わらせるため、展示、教育普及、交流・サービス事業を中核事業とし、活動の根幹となる資料や情報を蓄積するための調査研究・収集保存事業を新たに設け、事業を推進する。



2. 各事業

(1) 展示事業

① 植村直己の人となり・スピリットを正しく伝える

- 植村直己の功績を正しく理解してもらうとともに、その人柄を伝えられる展示を展開する。展示を通して彼のスピリットに触れ、利用者にチャレンジ心を養ってもらえるようにする。

② コンテンツは新規開発し、定期的に更新

- 冒険館の資料や情報を根幹に、市民や関係機関等と協働し、常に新しいコンテンツを開発して利用者に提供する。

③ 改善を繰り返し替えし、効果を高める

- コンテンツは、利用者の反応を見ながら、教育的な効果や使い勝手等を常に点検し、分析・改善を繰り返して効果を高めていく。

(2) 教育普及事業

① 遊びを通し成長できるプログラムを開発・提供

- 植村直己のスピリットを受け継ぎ、全ての子どもたちの生きる力を育むプログラムを開発し、提供する。
- 心や体にハンディキャップを持つ子どもでも、等しく楽しくチャレンジできるプログラムを開発し提供する。

② 学校教育と連携したプログラムを開発・提供

- 小中学校のふるさと学習や、アクティブ・ラーニングに対応できるプログラムを共同で開発し、提供する。
- 教育委員会等と連携し、不登校や発達障害の児童・生徒の居場所となるプログラムを共同で開発し、提供する。

③ 担い手育成のプログラムを開発・提供

- 運営の担い手を育成するため、解説ガイド・ボランティア育成のための講座や教室を開催する。
- 子ども解説員や子どもインストラクター等、小中高生からボランティアに参加できるしくみを検討。

(3) 交流・サービス事業

① 積極的な広報で施設利用を促す

- ホームページやSNSを活用した、日常的で活発な情報発信を行う。“いいね！”をたくさん付けてもらい、クチコミで拡散できるようにする。
- “パブネタ”を常に提供し、マスコミやネットで施設や活動の露出度を高める。

② フィールドミュージアムのにぎわいづくりで観光活性化

- 神鍋高原との連携で日高地域全体をフィールドにしたプログラムを開発・提供。
- 足固めを行った上で豊岡市全域と連携したツアー等を企画。豊岡市の観光活性化に寄与する事業を展開する。

(4) 収集保存・調査研究事業

① 資料や情報は継続的に収集保存し、良好な状態で未来に継承

- 植村直己に関連するモノを中心に、資料や情報を収集する。
- 中長期的に、国内外の冒険・冒険家に関する受入・収集を検討する。

② 収集した資料や情報を基盤に調査研究活動の成果を中核事業に反映

- 関係諸機関と連携して調査研究を継続的に実施する。
- 活動の成果は、コンテンツやプログラムに反映していく。

第7章 管理運営計画

1. 運営方式の検討

(1) 豊岡市の状況

豊岡市は積極的に指定管理者制度を導入

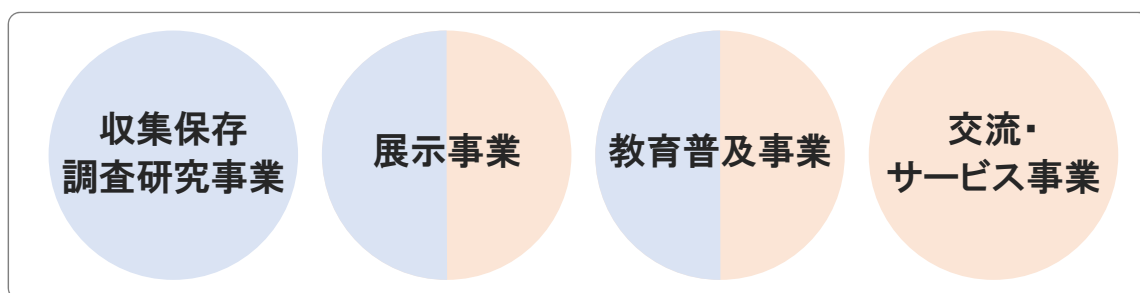
- 豊岡市では、公の施設の管理に民間活力を活用する指定管理者制度を積極的に導入し、平成27年4月1日現在、111の施設を民間に管理運営を委託している。
- うち、展示施設においては、コウノトリ文化館、ハチゴロウの戸島湿地等が市民団体(NPO法人)へ委託されている。城崎文芸館や麦わら細工伝承館は観光協会へ委託されている。また、シルク温泉、北前館等、民間企業(株式会社)に委託されている施設も少数ながら存在する。

(2) 冒険館の運営方式

指定管理者制度の導入を前提に

民間活力の参入を促し質の高いサービスの提供を今後検討

- 収集保存・調査研究事業は、その性質上、長期に渡り安定的に継続する必要があるため、直営事業とする。
- 展示、交流・サービス、教育普及事業を民間事業者へ委託することにより、質の高いサービスが提供できると考えられる。事業の継続性と、民間の活力・ノウハウ導入を両立させ、費用対効果の高いサービスを提供していく。
- 運営の継続性、安定性を担保するため、長期の指定管理期間の設定を検討する。
- 運営方式のあり方は、今後慎重に検討していくとともに、評価委員会等、豊岡市の意向を速やかに運営へ反映していけるしくみづくりも併せて検討していく。



図：直営事業と民間委託事業の概念

凡例 直営 指定管理者

2. 施設利用

(1) 開館日・開館時間

子ども・家族が利用しやすい開館日数や時間を検討

- 放課後の利用、長期休暇の利用等、子どもや家族が利用しやすい開館日数・時間を設定する。
- 週休1日を基本とし、夏休み等の多くの利用者が見込める時期は無休を検討する。
- 利用状況に応じ、夕方や夜間利用を促すため、開館時間の延長も視野に入れる。
- 例えば、週末は営業時間を延長して仕事帰りの大人がボルタリングを楽しめる等、利用者のニーズを汲みながら柔軟な対応ができるようにする。

(2) 利用料金の考え方

受益者負担の見地から利用料は徴収

但し、豊岡市民は減免を検討

- 恒常的な財政負担を軽減し、拠点施設を安定的に運営していくため、適切な料金を設定する。
- 利用者が気軽に利用しやすいことへ配慮しつつ、入館料を設定する。館内のコンテンツは入館料で利用できることを基本とする。
- 運営負担や維持負担の大きなコンテンツやプログラムは、入館料に加えて課金を検討する。
- 子どもを中心に普段利用を促すため、豊岡市民は減免措置を検討する。また、周辺に数少ない本格的な子ども施設として、但馬地方の中核を担うことを目的に、但馬地方の市町の子どもの利用の減免も中長期的に見据える。
- 団体利用や高齢者利用、障がい者利用等も、減免措置を検討する。

3. 組織の検討

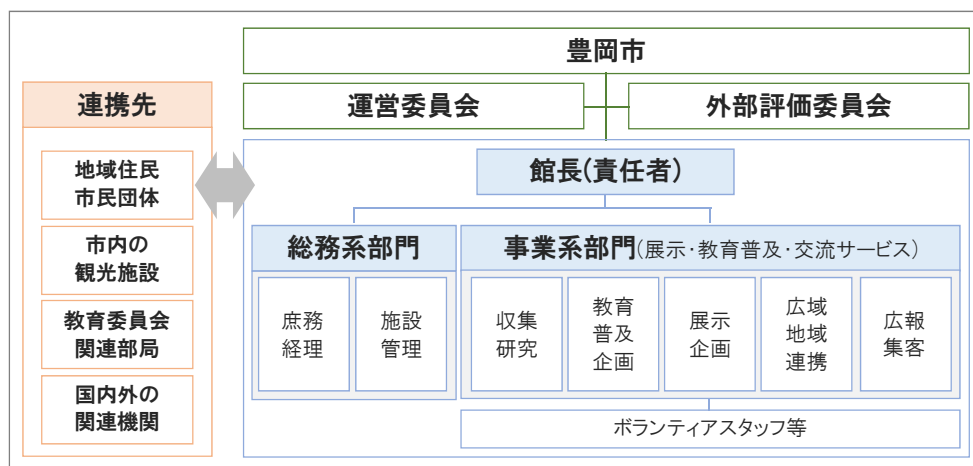
(1) 基本的な考え方

持続的な事業活動や外部連携の実現を可能とする 十分なスタッフを配置

- 植村直己を顕彰するとともに、利用者にチャレンジする気持ちを以てもらう、生まれ変わった冒険館の基本的な性格から、組織には安定性と継続性が求められる。
- また、利用者のニーズに即応できるフットワークの良さ、関係諸機関との連携体制も確保した組織が求められる。
- 従って、組織体制や人員配置のあり方は、今後慎重に検討していく。

(2) 組織体制(案)

- 開かれた運営を実現するため、冒険館の運営に対して客観的な意見を述べられる外部評価委員会を設置する。
- 館長の指揮下、総務系スタッフと、事業系のスタッフを配置する。
- 展示・教育普及・交流サービスの事業系部門は、それぞれの役割を担うスタッフを配置するとともに、相互に連携を図るマルチロールの役割を担い、効率的に運営していく。
- また、地域住民や市民団体、市内外の関係各機関と連携し、市内全域の絆が深まり、にぎわいが広がる活動を継続的に展開できるようにしていく。



図：組織体制案(どの様な役割が必要か示すもので、ポスト数を示すものではない事に留意)

第8章 事業推進計画

1. 事業スケジュール

(1) 基本的な考え方

- 冒険館を新たに生まれ変わらせるためには、遊びのプログラムの開発や、それを実施するための組織づくりから始める必要がある。そのため、新たに展開する事業をさらに精査していくとともに、民間事業者の参画のあり方や、関連諸機関との連携方策を今後検討していく。
- また、活動の拡張に必要な場の拡張についても、設計や施工を伴う事業となるため、今後、具体的な実施スケジュールを検討していく。
- 一つの考え方として、平成32(2020)年度に東京オリンピック・パラリンピック競技会の開催が予定され、日本が世界中に注目される。チャレンジング・スピリットに触れ、やってみようと思う心を持ち新たなことに挑むことを考える、またとない機会であり、事業推進の一つの節目として捉えておく。

(2) 先行事業の取り組み(案)

- 機能強化の事業推進は、ハードありきでハコモノに頼るものではなく、様々なソフト的な取り組みを先行して展開した上でその効果をよく検証し、真に必要な設備を整えていく。

【先行事業の具体例】

ホームページの充実化

- インターネットは、観光情報を最初に収集する手段として、最も用いられている手段。
- 植村直己の功績や、収蔵品の詳細解説等、きめ細やかに情報を発信することにより、たくさんの人に興味を持つきっかけを提供する。

SNSの積極的活用

- ネット上へ頻繁に情報を発信し続けることで施設の露出度を高めていく。
- Twitter、Instagram、LINE 等の SNS によって日々の情報を発信することで話題性が高まれば、クチコミが拡がり、施設の存在が一気にブレイクする可能性がある。

インターネット意見募集

- 現在 HP で募集している「植村直己さんの思い出をお聞かせ下さい」を発展拡張させ、トップで取り上げる。
- 植村直己の思い出からオマージュ等、国内外のファンから募集した意見は投稿者の同意を得た上で公開し、ファンサイト化していく。

ふるさと納税の活用

- 現在の「植村直己顕彰基金」を発展拡張させ、ふるさと納税によって全国に寄付金を呼びかける。
- 冒険賞授賞式や講座・講演への招待や、一流のガイドによる冒険ツアーへの参加券等、冒険館らしい謝礼品を企画してアピールする。

勉強会や研究会の実施

- 運営スタッフを中心に、関係部局を交えて運営スキルや集客向上策の勉強会や研究会を行う。
- 地域住民や市民団体を交え、日高地区のにぎわいづくりや集客の方策等の勉強会や研究会を行い、地域全体で機運を醸成する。

大学との連携

- 植村直己の母校はもとより、例えば京阪神の大学の子ども系、教育系、福祉系、観光系等の学科やゼミと連携し、インターンシップや実習の場として冒険館を活用してもらう。
- 特に若者世代に植村直己を知ってもらい、クチコミ拡散も狙う。

プログラムの試行

- 子どもの遊びやプログラムを開発し、実際に遊んでもらって、子どもの反応をみたり、感想を聞いたりして遊びやプログラムを改善し、コンテンツの設計や製作に役立てる。
- 子どもの声を反映してより楽しい遊びやコンテンツ開発に役立てる。

収益事業の試行

- 近隣の飲食店と連携した軽食のケータリングサービスや、地産の朝採れ野菜の販売等、地域と共同した収益事業を試験的に実施する。
- 地域全体の機運を醸成や話題性を提供するとともに、データは事業計画にフィードバックしていく。

試行のプレイベント化

- プログラムや収益事業の試行は地域住民と連携し、いくつもの組み合わせによりイベント化。
- 定期的開催していくことによって名物させ、にぎわいを形成していくとともに、リニューアルを PR する機会としていく。

2. 事業費

- 既存施設は整備後20年が経過し、その間常設展示は更新されていないため陳腐化しており抜本的な改修が必要である。
- 冒険館の機能強化に必要な展示のリニューアルあるいは増設に係る経費をプランとしてまとめた。
- 必要な予算は、国庫補助等の外部資金の活用も図りながら財源を確保していく。

植村直己冒険館 施設整備項目別事業費見込

項 目		A案	B案	C案
		既存施設改修 既存展示リニューアル	既存施設改修 既存展示リニューアル(一部)	既存施設改修 (展示はそのまま)
設定条件	(1) 既存延床面積	1,373 m ²	1,373 m ²	1,373 m ²
	(2) 既存展示対象面積	700 m ²	400 m ²	－ m ²
事業費	① 建築設計費	13,800 千円	13,800 千円	13,800 千円
	② 建築工事監理費	6,500 千円	6,500 千円	6,500 千円
	③ 建築工事費	100,000 千円	100,000 千円	100,000 千円
	④ 展示設計費	32,100 千円	13,200 千円	－ 千円
	⑤ 展示製作費	308,000 千円	176,000 千円	－ 千円
	事業費計	460,400 千円	309,500 千円	120,300 千円

項 目		D案	E案	F案
		既存展示リニューアル (既存施設はそのまま)	既存展示リニューアル(一部) (既存施設はそのまま)	施設増築 (既存施設、展示はそのまま)
設定条件	(1) 既存延床面積	－	－	－
	(2) 既存展示対象面積	700 m ²	400 m ²	－
	(3) 増築延床面積	－	－	500 m ²
	(4) 増築展示対象面積	－	－	350 m ²
事業費	① 建築設計費	－	－	21,500 千円
	② 建築工事監理費	－	－	12,800 千円
	③ 建築工事費	－	－	171,000 千円
	④ 展示設計費	32,100 千円	13,200 千円	11,200 千円
	⑤ 展示製作費	308,000 千円	176,000 千円	112,000 千円
	事業費計	340,100 千円	189,200 千円	328,500 千円

項 目	G案(A案+F案)	H案(B案+F案)	I案(C案+F案)
	施設増築 既存施設改修 既存展示リニューアル	施設増築 既存施設改修 既存展示リニューアル(一部)	施設増築 既存施設改修 (既存展示はそのまま)
事業費計	788,900 千円	638,000 千円	448,800 千円

項 目	J案(D案+F案)	K案(E案+F案)
	施設増設 既存展示リニューアル (既存施設はそのまま)	施設増設 既存展示リニューアル(一部) (既存施設はそのまま)
事業費計	668,600 千円	517,700 千円

※既存施設建築工事費（躯体・設備改修）は、躯体クラック補修、受変電設備更新、空調設備更新等
 ※上記の事業費には外構工事が含まれていない。

3. 検討課題

- 新たな冒険館を実現するためには、部局間や関係諸機関との連携が必要不可欠なことから、以下の事項について、その実現性を今後協議していく。
- 教育機関や子育てセンター等、市内の関連施設と活動内容が重複しないようにして、冒険館で体験することの必然性を持たせる。
- 市内小中学校の学習利用や不登校・発達障害の子どもの居場所づくりは、教育委員会と慎重に協議していく。
- 中高生等が一人でも気軽に訪ねられる交通インフラの確保も今後検討していく。

参考資料

資料1. 施設の状況

(1) 基本情報

① 建物の概要

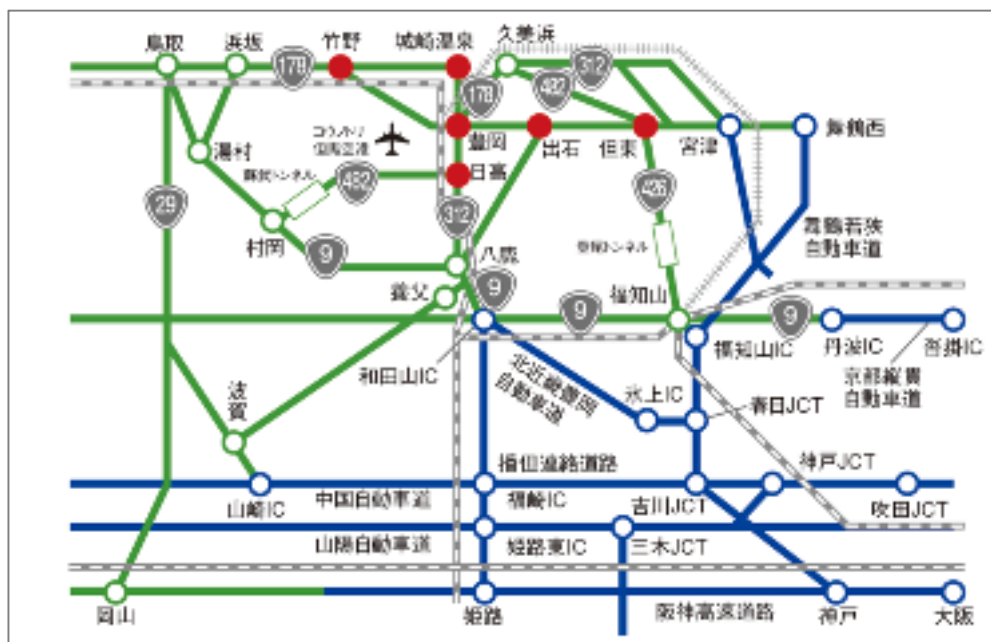


敷地図

建築デザインコンセプト	受賞歴
自然への畏敬 原風景の再生 メモリアルとしての空間 植村直己の冒険	日本建築学会賞 公共建築百選 土木学会デザイン賞(優秀賞)

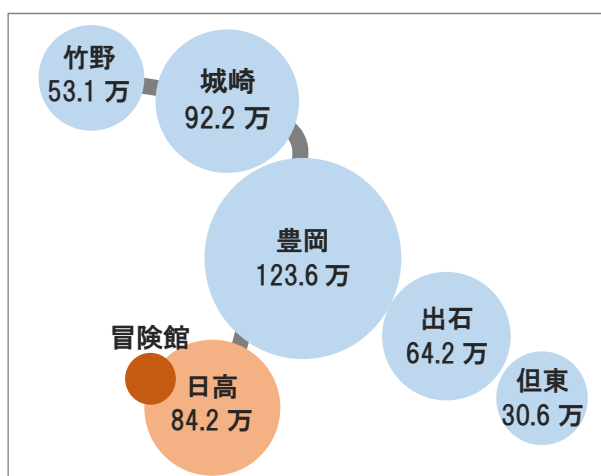
② アクセス

- 豊岡市への自動車でのアクセスは、京都からは京都縦貫自動車道等を経由、大阪からは中国自動車道、北近畿豊岡自動車道等を経由、神戸からは山陽自動車道や播但連絡道路を経由して、それぞれ約3時間の距離にある。
- 電車では、京都からJR山陰本線を経由して約2時間20分、大阪からはJR福知山線・山陰本線を経由、神戸(三宮)からは、山陽本線・播但線・山陰本線を経由し、それぞれして約2時間30分の距離にある。
- コウノトリ但馬空港へは、伊丹空港から旅客機が1日2便運用され、約40分で結ばれている。



図：豊岡市へのアクセス

- 日高地区はスキー場として知名度の高い神鍋高原を含み、豊岡市の6地区の中で3番目に多い観光客を集客しているが、豊岡市の観光の主動線となる城崎～豊岡～出石のラインから外れている。将来的には北近畿豊岡自動車道が延伸されるため、今後の集客に期待が抱ける。
- 冒険館は神鍋高原の動線上に立地するが、山陰本線から離れ、特に鉄道利用の観光客にとっては不便な位置に存在する。



図：豊岡市6地区の年間観光客数（平成25(2015)年度）

(2) これまでの活動

① 植村直己冒険賞

- 植村直己の優れた人となりを後世に継承するため、自然を相手に創造的な勇気ある行動した人または団体に贈ることを目的に、平成8(1996)年に創設された。

これまでの受賞者		
第1回	尾崎隆	幻の山 ミャンマー最高峰カカボラジ初登頂
第2回	米子昭男	左腕を失うハンディを乗り越え、ヨットで大西洋・太平洋単独横断
第3回	関野吉晴	人類の旅 5 万キロを探るグレートジャーニーで冒険精神発揮
第4回	大場満郎	史上初の北極海と南極大陸を徒歩で単独横断に成功
第5回	神田道夫	熱気球でヒマラヤ・ナンガパルバット(8125m)越えに成功
第6回	中山嘉太郎	中央アジア・シルクロード 9300km を駆け抜けた
第7回	山野井泰史・ 山野井妙子	ギャチュンカン峰(7952m)の登頂に成功
第8回	安東浩正	日本人初、厳冬期シベリア単独自転車横断
第9回	渡邊玉枝	女性世界最高齢で 8000m 峰 5 座目となるローツェ登頂
第10回	永瀬忠志	リヤカーを引き世界各地を徒歩踏破(4 万 km)
第11回	小松由佳	世界第 2 位の高峰 K2(8611m)に日本人女性初登頂
第12回	野口健	エベレストに北稜(中国側)から登頂成功
第14回	中西大輔	11 年かけ自転車で地球 2 周 15 万キロ走破
第15回	栗秋正寿	中央アラスカ山脈 83 日間に及ぶハンター冬季単独登頂に挑戦
第16回	斉藤実	ヨットで単独「最高齢(77 歳)・最多(8 回)」世界一周達成
第17回	竹内洋岳	14Project(ダウラギリに無酸素登頂し、8000m 峰 14 座完登)
第18回	田中幹也	厳冬カナダで自身の可能性に挑み続け 19 年で 2.2 万 km 踏破
第20回	本多有香	北米二大犬ゾリレース完走

表：植村直己冒険賞受賞者（第13回、第19回は該当者辞退）

- 第20回を迎える今年度は、極北の原野で犬たちと暮らし、マッシャー（犬ゾリ使い）となる夢を実現し、北米二大犬ゾリレースを完走した本多有香氏に贈られた。

写真：「2015 冒険賞」本多有香氏



② 冒険やチャレンジを顕彰する活動

ア.日本冒険フォーラムの開催

- 冒険者のチャレンジ精神を讃え、日本の「冒険文化」を考えるきっかけを創るため、全国のチャレンジャーが一同に集い、植村直己の素顔を振り返りながら考えることを目的とする。植村直己の母校である明治大学の協力により、これまでに2回開催した。



写真：2015日本冒険フォーラム

イ.チャレンジを応援する活動

- 冒険館には、自転車で日本や世界一周に挑戦する等、様々な冒険にチャレンジしている人たちが立ち寄ることが多いことから、それらの人々を館内の展示やホームページで紹介し応援している。
- 植村直己の心をつなごうプロジェクトとして植村の大学時代のニックネーム「どんぐり」にちなみ、シリアルナンバーが振られた「どんぐりフラッグ」を販売している。
- 山・自然・そして植村直己を愛する人々が集う「どんぐり山友会」を結成し、毎年9月には「一度は登ってみたい」と思っている人を後押しする初心者を対象とした富士山登山を実施している。



写真：冒険館に立ち寄ったチャレンジャーを紹介



写真：(左)どんぐりフラッグ (右) どんぐり山友会

③ 企画展ほか多彩な事業活動

- 新館（研修棟）では、豊富に収蔵する植村直己の装備品を資源に、テーマを掘り下げた企画展が定期的に行われているとともに、毎年贈られる冒険賞の受賞者を紹介する特別展が毎年実施されている。
- また、これまでに、サバイバル体験やナイトウォーキング、登山、自転車での遠出イベントを、子どもを対象に実施してきた。
- この他、世界的に著名なイタリアの登山家ラインホルト・メスナーの装備品の交換や、市職員を南極地域観測隊越冬隊に同行させ、その体験を市内の学校で紹介する出前講座を開催する等、多彩な活動を展開してきた。

近年の企画展・特別展	
平成 23 (2011)年	植村直己を支えた人たちⅡ ～メッセージに込められた願いと祈り～
平成 24 (2012)年	植村直己を継ぐ者たち
平成 25 (2013)年	南極で取り壊された犬ゾリ
平成 26 (2014)年	こんな日本人がいた ～今 蘇る 植村直己～
毎年開催	冒険賞受賞者特別展 (1997年～) 旅人・チャレンジャー紹介 マッキンリーに眠る植村直己

表：近年開催された企画展・特別展

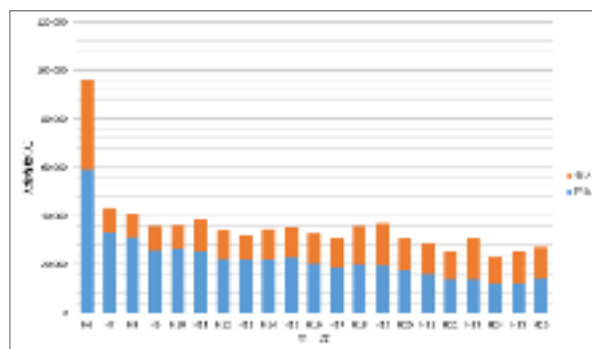
近年のその他の多彩な活動	
体験・ 交流イベント	いかだ下り・冒険塾、トレッキング 小学生対象チャレンジ事業等
講座・ 講演会	植村直己に学ぶ講座、 精神をつなぐ事業、語る会等
装備品交換	ラインホルト・メスナー 山岳博物館と装備品を交換
南極派遣	南極地域観測隊越冬隊に市職員 を派遣、市内へ出前講座
発刊物	冒険館だより(15号) 冒険賞報告書(毎回) 植村直己小冊子 (市内全児童に配付)

表：近年のその他の活動

(3) 利用状況

① 個人・団体別の利用者数

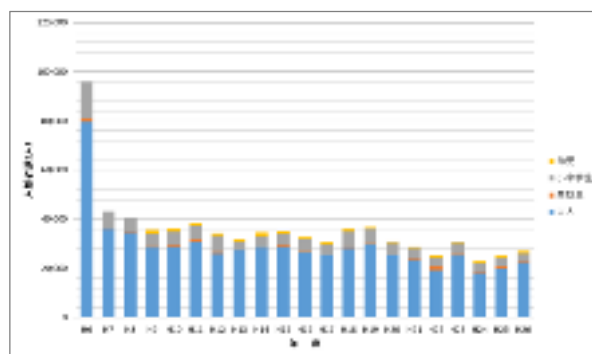
- 開館初年度となる平成6(1994)年度には9.5万人の利用者を集めたが、翌年度の利用者は4.3万人と、半減している。落ち込み後は安定したが、近年の利用者は概ね2～3万人で推移し、暫減傾向にある。
- 開館後しばらくは団体利用に比率が高かったが、近年では個人・団体利用はおよそ半々の割合で推移。



グラフ：個人・団体別利用者数

② 年齢属性ごとの利用者数

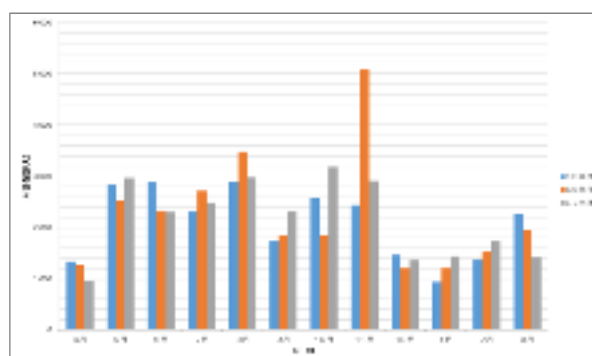
- 開館当初から近年まで、一貫して大人が利用者数の大半で、うち、65歳以上の利用は2割以上を占める。
- 子どもの利用は2割前後で推移し、うち、小中学生の利用は概ね1.5割程度で、子どもにあまり利用されていないことが解る。



グラフ：年齢属性ごとの利用者数

③ 月別の利用者数

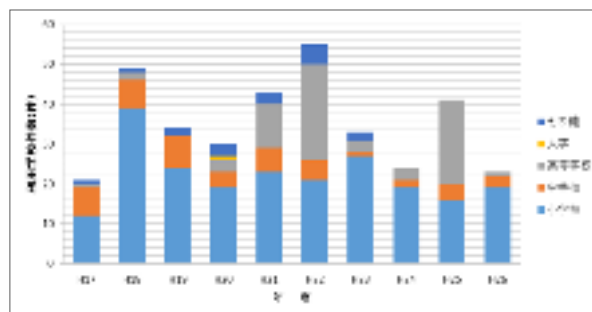
- 過去3年間では、5月から11月にかけての利用が多い傾向にある。
- 冬期は神鍋高原でのスキーを目的に、日高地区へ比較的多くの観光客が集まるが、冒険館の冬期利用者は少なく、相関性は見られないことが解る。
- 26(2014)年11月の利用者が突出しているのは、イベント開催によるもの。



グラフ：月別の利用者数

④ 校種別の学校利用数

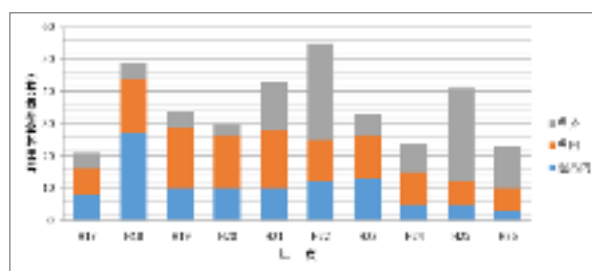
- 過去10年間の学校利用は、年度によりばらつきが大きい。小学校は毎年十数校～三十数校が訪れているのに比べ、相対的に中学校の利用が少ないことが見て取れる。
- 高校は特にばらつきが大きく、全く利用されない年度もある。大学利用は過去10年間で1件のみ。



グラフ：校種別の学校利用数

⑤ 所在別の学校利用数

- 兵庫県内、但馬地方内の学校利用は近年大きく落ち込んでいるが、県外の学校利用は年度によりばらつきはあるものの、増加傾向にある。
- 豊岡市内の小学校29校中3～19校、中学校は10校中0～3校の利用に留まり、豊岡市の子どもにあまり利用されていないことが解る。



グラフ：所在別の学校利用数

(3) 運営状況等

- 冒険館は、6名の常駐スタッフによって運営されている。平成26(2014)年度から館長は嘱託職員となり、正職員は2名、嘱託職員4名で構成される。
- 人件費・施設管理費・事業費を含めた支出額は年間5千万円台で推移、入館料をはじめとする収入は年間7～9百万円台で推移している。

項目	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	説明
職員	正職員 3名 嘱託職員 3名	正職員 3名 嘱託職員 3名	正職員 3名 嘱託職員 3名	正職員 2名 嘱託職員 4名	正職員 2名 嘱託職員 4名	平成26年度から館長は嘱託職員
人権費 施設管理費 A 館事業費	55,546,998 円	57,587,666 円	56,743,319 円	50,903,399 円	49,205,516 円	人件費は 平均的な経費で精算 植村直己冒険賞事業費に係る経費は除く
入館者 B	30,900 人	22,866 人	25,062 人	26,999 人	26,051 人	
開館日数 C	309 日	307 日	307 日	305 日	305 日	
入館料収入 D	8,381,697 円	6,403,201 円	6,545,212 円	6,810,896 円	6,557,457 円	
グッズ関連収入 E	1,138,214 円	877,454 円	830,931 円	798,510 円	1,011,160 円	
その他収入 F	46,641 円	45,213 円	66,885 円	75,070 円	53,592 円	
収入額(D+E+F) G	9,566,552 円	7,325,868 円	7,443,028 円	7,684,476 円	7,622,209 円	
1日当たりの収入額(G/C) H	30,960 円	23,863 円	24,244 円	25,195 円	24,991 円	
開館1日当たりの運営原価(A/C) I	179,764 円	187,582 円	184,832 円	166,896 円	161,330 円	平成27年度 I/H=6.5
1日当たりの収支(H-I)	△ 148,804 円	△ 163,719 円	△ 160,587 円	△ 141,701 円	△ 136,339 円	
入館者1人当たりの運営原価 J	1,798 円	2,518 円	2,264 円	1,885 円	1,889 円	
入館者1人当たりの客単価(G/B) K	310 円	320 円	297 円	285 円	293 円	
入館者1人当たりの収支(K-J)	△ 1,488 円	△ 2,198 円	△ 1,967 円	△ 1,601 円	△ 1,596 円	

表：冒険館の維持管理にかかる収入出（過去4年間）

資料2. 施設を取り巻く状況

(1) 豊岡市の関連施策等

① 豊岡市総合計画 基本構想

- 平成19(2007)年に策定された豊岡市基本構想では、めざすまちの将来像を「コウノトリ悠然と舞う ふるさと」とし、まちづくりに望む基本姿勢を以下の通り掲げた(抜粋)。

豊岡市基本構想

めざすまちの将来像

コウノトリ悠然と舞う ふるさと

まちの将来像を実現するテーマ

- 1.安心と安全を築く
- 2.地域経済を元気にする
- 3.人と文化を育てる

まちの将来像を実現するための進め方

- 1.豊岡モデルの展開
- 2.参画と協働
- 3.特色ある地域の連携

まちのフレーム

1. 将来人口の考え方

定住人口の目標を 90,000 人とし、交流人口の増加をめざします。

② 豊岡市総合計画 後期基本計画

- 基本構想後期基本計画（平成24年度～平成28年度）が策定された。ここでは、計画全体の中で、冒険館の機能強化に関連すると考えられる施策に印をしている。

第1章 安全に安心して暮らせるまち

第1節 安全を守るまちづくり

- 1 防災・減災力の向上
- 2 消防・救急体制の充実
- 3 安全な暮らしの構築

第2節 安心しておだやかに暮らせるまちづくり

- 1 健康づくりの推進
- 2 医療環境の充実
- 3 安心して暮らせる地域社会の構築
- 4 高齢者福祉の充実
- 5 介護保険制度の充実
- 6 障害者福祉の充実
- 7 社会保障の適正実施
- 8 斎場・霊苑の整備

第2章 人と自然が共生するまち

第1節 人と自然が響き合うまちづくり

- 1 コウノトリと共生する豊かな自然の保存・再生・創造
- 2 コウノトリと共生する豊かな文化の保存・再生・創造

第2節 循環型のまちづくり

- 1 循環型社会の構築

第3節 快適で美しいまちづくり

- 1 美しい環境の確保
- 2 水道・下水道の整備

第3章 持続可能な「力」を高めるまち

第1節 地域経済を元気にするまちづくり

- 1 情報発信戦略の推進
- 2 観光の振興
- 3 農業の振興
- 4 林業の振興
- 5 水産業の振興
- 6 商業の振興
- 7 工業の振興
- 8 雇用対策の推進

第2節 賑わいと魅力を創るまちづくり

- 1 総合的な土地利用
- 2 住環境の整備
- 3 道路網の整備
- 4 公共交通の充実
- 5 魅力ある景観の形成
- 6 緑豊かな公園の整備
- 7 地域情報化の推進

第3節 活力を生むまちづくり

- 1 定住促進
- 2 魅力ある地域の形成

第4章 未来を拓く人を育むまち

第1節 健やかで心豊かな子どもを育むまちづくり

- 1 子育て環境の充実
- 2 基礎となる力の定着と創造性を伸ばす教育の推進
- 3 教育環境の充実
- 4 家庭・地域教育力の向上

第2節 伝統・文化を未来につなぐまちづくり

- 1 ふるさとを愛する心の育成
- 2 多文化共生の推進
- 3 国内交流の推進

第5章 人生を楽しみお互いを支え合うまち

第1節 日々人生を楽しむまちづくり

- 1 生涯学習の推進
- 2 芸術文化の振興と文化財保護
- 3 生涯スポーツの推進
- 4 高齢者の社会参加・生きがいづくり

第2節 お互いを支え合うまちづくり

- 1 地域力の向上

第6章 基本計画の実現に向けて

第1節 特色ある地域の成長と連携

- 1 特色ある地域づくり

第2節 参画と協働のまちづくり

- 1 市民・行政パートナーシップ
- 2 男女共同参画社会づくりの推進

第3節 新しい時代にふさわしい行政経営

- 1 効率的、効果的な行政組織の構築
- 2 効率的、効果的な行財政運営の推進
- 3 周辺市町や関係自治体との連携

表：豊岡市総合計画 後期基本計画の施策一覧

③ 第3次とよおか教育プラン

- 教育委員会では、「豊岡の子どもは豊岡で育てる」という視点に立ち、平成18(2006)年度に市独自の教育行動計画を策定し、子どもたちを育てるための具体的な取組みを学校園・家庭・地域・行政で実践してきた。
- 基本理念を「子どもたちが生涯にわたって生き生きと輝く教育をめざして」を掲げ、「豊かな心」「健やかな体」「確かな学力」をめざす子ども像としている。

ふるさと豊岡を愛し、夢の実現に向け挑戦する子どもの育成

～夢実現力(なりたい自分になるためにがんばりぬく力)を子どもたちに～

「幹づくり・根っこづくり・土づくり」の視点による施策体系表

小・中学校が取り組む施策	幼・保・認可が取り組む施策	家庭・地域が取り組む施策
<p>(1) 夢実現力を育む教育の推進</p> <p>① 「あたまの力」の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 学力向上策 ㊦ 小中連携教育を核とした連携教育 ㊦ 学校・家庭の緊密な連携 <p>② 「こころの力」の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 「夢実現力を育む」キャリア教育 ㊦ 体験を重視した活動 ㊦ 道徳教育 ㊦ 人権教育 ㊦ 環境教育 ㊦ グローバル化に対応した教育 ㊦ 防災教育 <p>③ 「からだの力」の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 体力・運動能力の向上 ㊦ 食育 ㊦ 健康教育 <p>④ 特別支援教育の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 発達特性の理解と早期からの一貫した支援 ㊦ 交流及び共同学習 ㊦ 保護者支援 <p>(2) 子どもたちの学びを支える仕組みの確立</p> <p>① 学校園の組織力及び教職員の資質能力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 組織的かつ機動的な協働体制の確立 ㊦ いじめ等問題行動の未然防止 ㊦ 多様な課題への実践的指導力の向上 <p>② 安全・安心な教育環境の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 教育環境の整備・充実 ㊦ 様々な困難や課題を抱える子への就学支援 <p>③ 家庭の教育力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 親が成長するための学びの機会の提供 ㊦ 家庭教育への支援 <p>④ 地域全体で子どもを育てる環境づくりの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 地域と学校園の緊密な連携 	<p>(1) 夢実現力を育む教育の推進</p> <p>④ 「あたま・こころ・からだの3つの力を支える基礎力」の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 健康な体をつくる運動遊び ㊦ 基本的な生活習慣の確立 ㊦ 身近な環境への好奇心や探究心の育成 ㊦ 人の話を聞き、自分の思いを言葉で表現する力の育成 ㊦ 様々な体験活動 <p>⑤ 特別支援教育の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 発達特性の理解と早期からの一貫した支援 ㊦ 交流及び共同学習 ㊦ 保護者支援 <p>(2) 子どもたちの学びを支える仕組みの確立</p> <p>① 学校園の組織力及び教職員の資質能力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 組織的かつ機動的な協働体制の確立 ㊦ いじめ等問題行動の未然防止 ㊦ 多様な課題への実践的指導力の向上 <p>② 安全・安心な教育環境の整備</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 教育環境の整備・充実 ㊦ 様々な困難や課題を抱える子への就学支援 <p>③ 家庭の教育力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 親が成長するための学びの機会の提供 ㊦ 家庭教育への支援 <p>④ 地域全体で子どもを育てる環境づくりの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 地域と学校園の緊密な連携 	<p>(1) 夢実現力を育む教育の推進</p> <p>① 「あたまの力」の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 学校・家庭の緊密な連携 <p>② 「こころの力」の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 豊かな人間関係の構築 <p>③ 「からだの力」の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 食育 ㊦ 健康教育 <p>④ 「あたま・こころ・からだの3つの力を支える基礎力」の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 健康な体をつくる運動遊び ㊦ 基本的な生活習慣の確立 ㊦ 身近な環境への好奇心や探究心の育成 ㊦ 人の話を聞き、自分の思いを言葉で表現する力の育成 ㊦ 様々な体験活動 <p>(2) 子どもたちの学びを支える仕組みの確立</p> <p>③ 家庭の教育力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 子どもが伸びる習慣づくり <p>④ 地域全体で子どもを育てる環境づくりの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ㊦ 地域ぐるみで子どもを育成する体制づくり ㊦ 地域と学校園の緊密な連携

幹

根

土

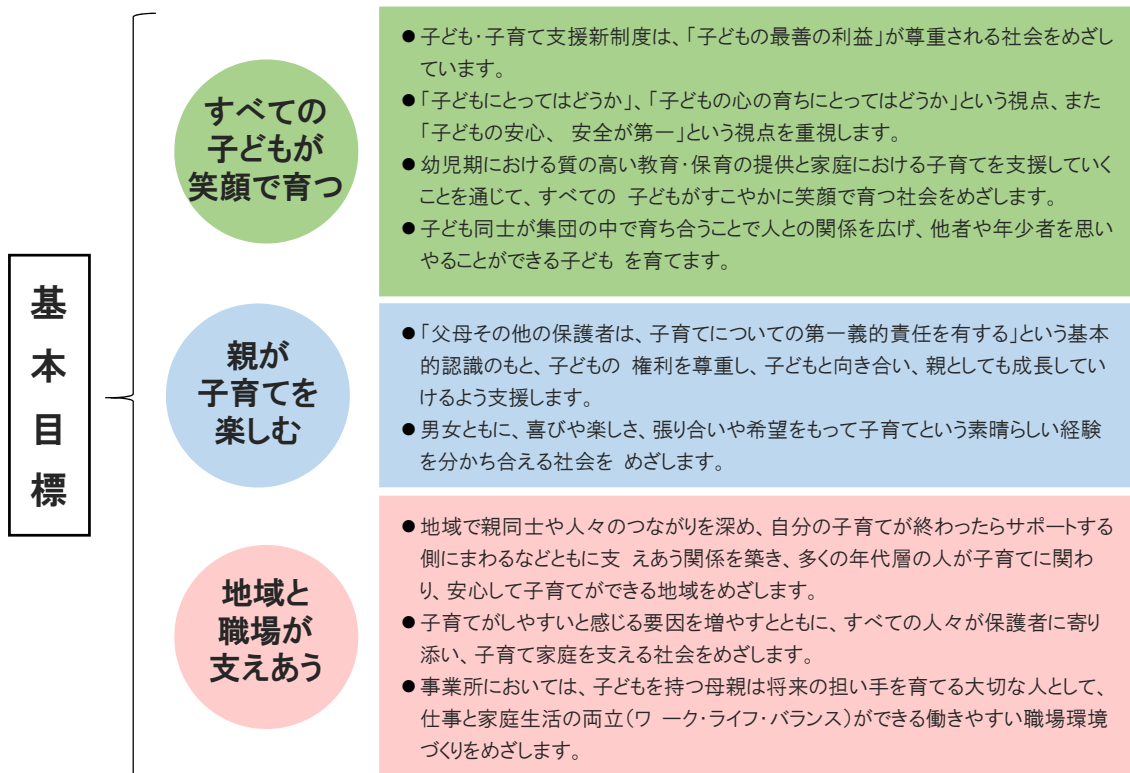
凡例

④ 豊岡市子ども・子育て支援事業計画

- 平成24(2012)年8月に「子ども・子育て支援法」が制定され、平成27(2015)年4月から「子ども・子育て支援新制度」がスタートした。
- 新制度では、市町村が主体となって、就学前の教育・保育や地域の子育て支援の充実を図るための施策を計画的に進めることとされている。
- これを受け、豊岡市は「豊岡市子ども・子育て支援事業計画」を策定し、本市の子育て家庭の現状と課題、潜在的なニーズを踏まえ、子どもを安心して産み育てられること、子どもが集団の中で互いに育ちあう環境を確保すること、また、子育ての不安や負担感を和らげ、親子がしっかりと向き合い、子育てが楽しいと感じられるよう、子育て支援の取組みを計画的に進める。

基本理念

子どもが元気に育つまち・子育てが楽しいまち 豊岡



表：豊岡市子ども・子育て支援事業計画（平成27年3月）より抜粋

⑤ 豊岡市子育てセンターの概要

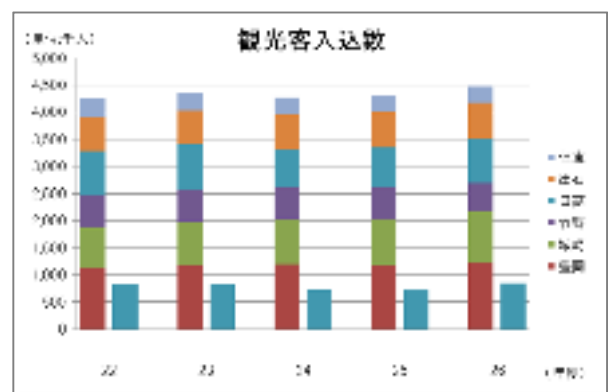
- 豊岡市では、市内6カ所に子育てセンターを設置している。子育てに関する話し合いや相談が気軽にできたり、学びや親子のともだちの輪を広める場として、市民の子育てを応援している。

センター名	豊岡総合	城崎	竹野	日高	出石	但東
規 模	市民プラザ (アイティ7F)	城崎庁舎2F		日高庁舎3F	出石庁舎1F	但東市民 センター1F
(広さ)	406.00㎡	168.02㎡	146.03㎡	503.19㎡	250.85㎡	158.23㎡
設 備	・ふれあい広場 ・子育て学習室 ・授乳室 ・子ども用トイレ	・スマイル広場 ・授乳室 ・子ども用トイレ ・ランチスペース	・遊戯室 ・相談室 ・図書室 ・授乳室 ・調理室	・子育て広場 ・子育てホール ・グループ活動室 ・授乳室 ・ロビー ・子ども用トイレ	・開放ひろば ・グループ活動室 ・相談室 ・授乳室	・わいわい広場 ・絵本の部屋 ・和室(食専用) ・子ども用トイレ
利用内容	・ひろば利用 ・子育てサークル ・親子体験事業 ・子育て相談 ・昼食利用 ・その他	・ひろば利用 ・子育てサークル ・親子体験事業 ・子育て相談 ・昼食利用 ・その他	・ひろば利用 ・子育てサークル ・親子体験事業 ・子育て相談 ・昼食利用 ・その他	・ひろば利用 ・子育てサークル ・親子体験事業 ・子育て相談 ・昼食利用 ・その他	・ひろば利用 ・子育てサークル ・親子体験事業 ・子育て相談 ・昼食利用 ・その他	・ひろば利用 ・子育てサークル ・親子体験事業 ・子育て相談 ・昼食利用 ・その他
休 館 日	火曜日・年末年始	日・月・祝日 ・年末年始	月・祝日 ・年末年始	月・日(第1以外) 第1土・祝日 年末年始	日・月・祝日 年末年始	日・月・祝日 年末年始

表：豊岡市子育てセンターの概要

⑥ 豊岡市の観光動向

- 豊岡市に訪れる観光客数は、わずかではあるが近年は増加傾向にある。
- 日高地域に訪れる観光客も微増しているが、近年はスキーの人气が低迷しているため、神鍋高原はピーク時の1/4に留まり、宿泊施設が大幅に減少する等、中長期的には苦戦を強いられている。



表：豊岡市の地区別観光客入込数

資料3. 管理運営方式の考え方

(1) 国内の状況

- 公の施設の管理に民間活力を活用する指定管理者制度は、全国の地方自治体で積極的に導入されているが、ミュージアムの分野に限った場合、全国の博物館・博物館類似施設で、指定管理者制度を導入している施設は約3割を占めるに過ぎず、全国的にはまだ少数といえる。

区分	博物館		博物館類似施設		計	
	施設数	割合	施設数	割合	施設数	割合
公立の施設数	724	100.0%	3,522	100.0%	4,246	100.0%
うち指定管理者導入施設数	158	21.8%	1,053	29.9%	1,211	28.5%
地方公共団体	-	0.0%	24	0.7%	24	0.6%
一般社団法人・一般財団法人	118	16.3%	522	14.8%	640	15.1%
会社	31	4.3%	211	6.0%	242	5.7%
NPO	4	0.01%	73	2.1%	77	1.8%
その他	5	0.01%	223	6.3%	228	5.4%





表：全国の公立博物館・博物館類似施設の指定管理者導入施設数（文部科学省社会教育調査（平成23年度）より）

(2) 運営方式の比較

方式	概要	メリット	デメリット
直接運営方式	<ul style="list-style-type: none"> ● 自治体が自ら管理運営を行う方式。 ● 運営や施設の維持管理の一部を民間に業務委託する場合もある。（清掃、警備等、施設の維持管理業務は民間委託するケースが多い） 	<ul style="list-style-type: none"> ● 自治体の方針等を運営に直接反映しやすい。 ● 自治体内部の連携や、他の公共施設等との連携を図りやすい。 ● 事業の安定性、継続性を担保しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 人事や会計などの行政制度により、柔軟な運営がしにくい場合がある。 ● 収入・支出に対するコスト意識が働きにくい。 ● 市民ニーズや社会状況に応じて変化する事業内容に合った人材の確保が難しい。
指定管理者方式	<ul style="list-style-type: none"> ● 公の施設の維持管理・運営を自治体の指定する法人、その他の団体が一定期間実施する制度。 ● 単独の事業者による場合のほか、複数事業者によるコンソーシアム（企業連合、資金連合等）が指定管理者となることも可能。 ● 公の施設の設置・管理については設置する自治体の条例化が必要。 ● 指定管理者の指定には、議会の議決が必要。 ● 指定管理期間は3～5年のケースが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 民間事業者などの専門性やノウハウ、柔軟性を活かした事業展開、サービス向上を図ることができる。 ● 民間事業者等の経営ノウハウにより、事業の効率化が期待できる。 ● 集客の見込める施設においてはインセンティブ※を与えることで導入効果が期待できる。 ※有料施設において利用料金の増収時に指定管理者の収入増や、指定管理料に上乗せして支払う報奨金等 	<ul style="list-style-type: none"> ● 指定管理者の公募、選定手続き等、自治体側の負担が増える場合がある。 ● 運営を委任するため、事業のノウハウが自治体内に蓄積されにくい。 ● 指定管理者が交代した場合、事業の継続性・安定性が確保されない場合がある。

表：直営方式と指定管理者方式の概要

(3) 冒険館へ導入が考えられる運営方式の比較

運営パターン	メリット	デメリット
1. 全ての事業を直営 	<ul style="list-style-type: none"> ● 責任が明確で、市の意向を運営に反映しやすい。 ● 事業を長期的・安定的な継続性を確保できる 	<ul style="list-style-type: none"> ● 組織・人材の硬直化を招く可能性がある。 ● 世情変化・流行へ柔軟に対応しにくい。
2. 全ての事業を指定管理者へ委託 	<ul style="list-style-type: none"> ● 責任が明確で民間のノウハウが期待できる。 ● 費用対効果の高いサービスが期待できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 運営者の交代で、人事や事業の継続性が担保できない。 ● 利益を優先し、サービスを提供しない可能性がある。
3. 直営を基本に一部を委託 	<ul style="list-style-type: none"> ● 広報集客で民間のノウハウが期待できる。 ● 費用対効果の高いサービスができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 豊岡市の運営方針と民間集客戦略が必ずしも一致しない可能性がある。 ● 責任区分が曖昧。
4. 直営を基本に積極的に事業を委託 	<ul style="list-style-type: none"> ● 事業の継続性と民間の活力・ノウハウ導入を両立させ、費用対効果の高いサービスが期待できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 指揮管理者・伝達系統が混乱する可能性がある。 ● 責任区分が特に曖昧になる可能性がある。

凡例  直営  指定管理者

植村直己冒険館機能強化基本構想策定委員

座長	平田オリザ	劇作家、演出家、青年団主宰、豊岡市芸術文化参与、こまばアゴラ劇場芸術総監督、城崎国際アートセンター芸術監督
委員	浅井栄一	元株式会社エー・エー・ピー代表、植村直己顕彰施設総合プロデュース
	上治丈太郎	公益財団法人日本オリンピック委員会国際人養成アカデミースクールマスター 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技組織委員会参与 前ミズノ株式会社代表取締役 副社長
	小田根厚芳	日高神鍋観光協会長
	関野吉晴	武蔵野美術大学教授（文化人類学）、1998「植村直己冒険賞」受賞
	矢島正枝	成美大学(現福知山公立大学) 経営情報学部 教授

問合先: 〒668-8666
兵庫県豊岡市中央町2-4
TEL: 0796-23-0341
豊岡市地域コミュニティ振興部生涯学習課